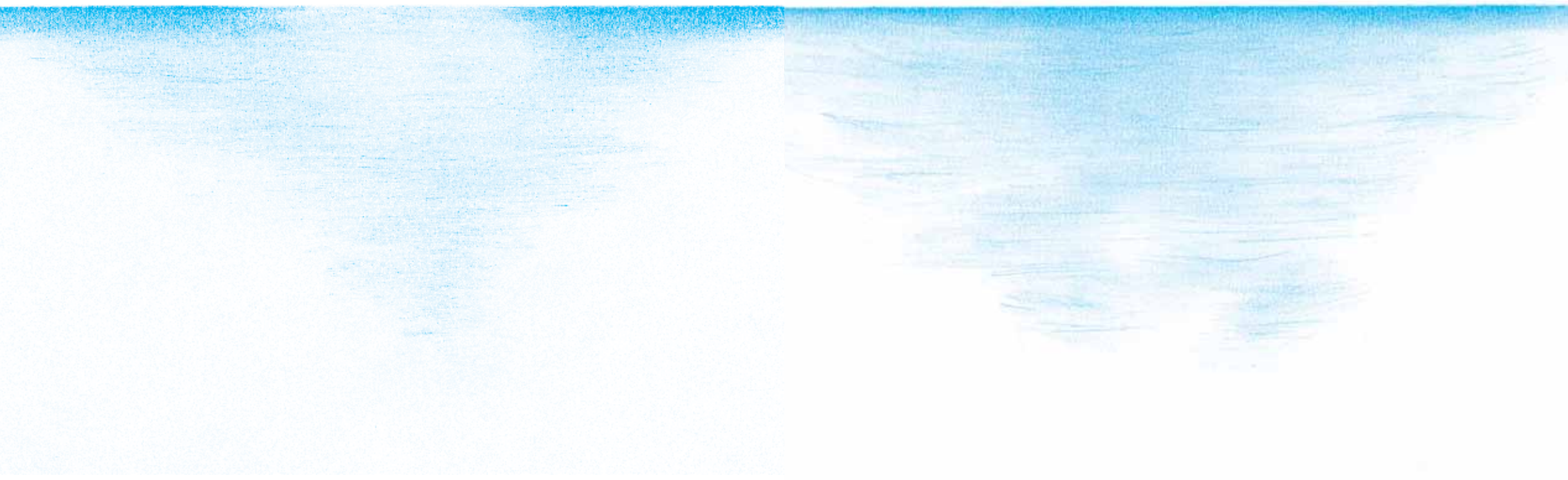




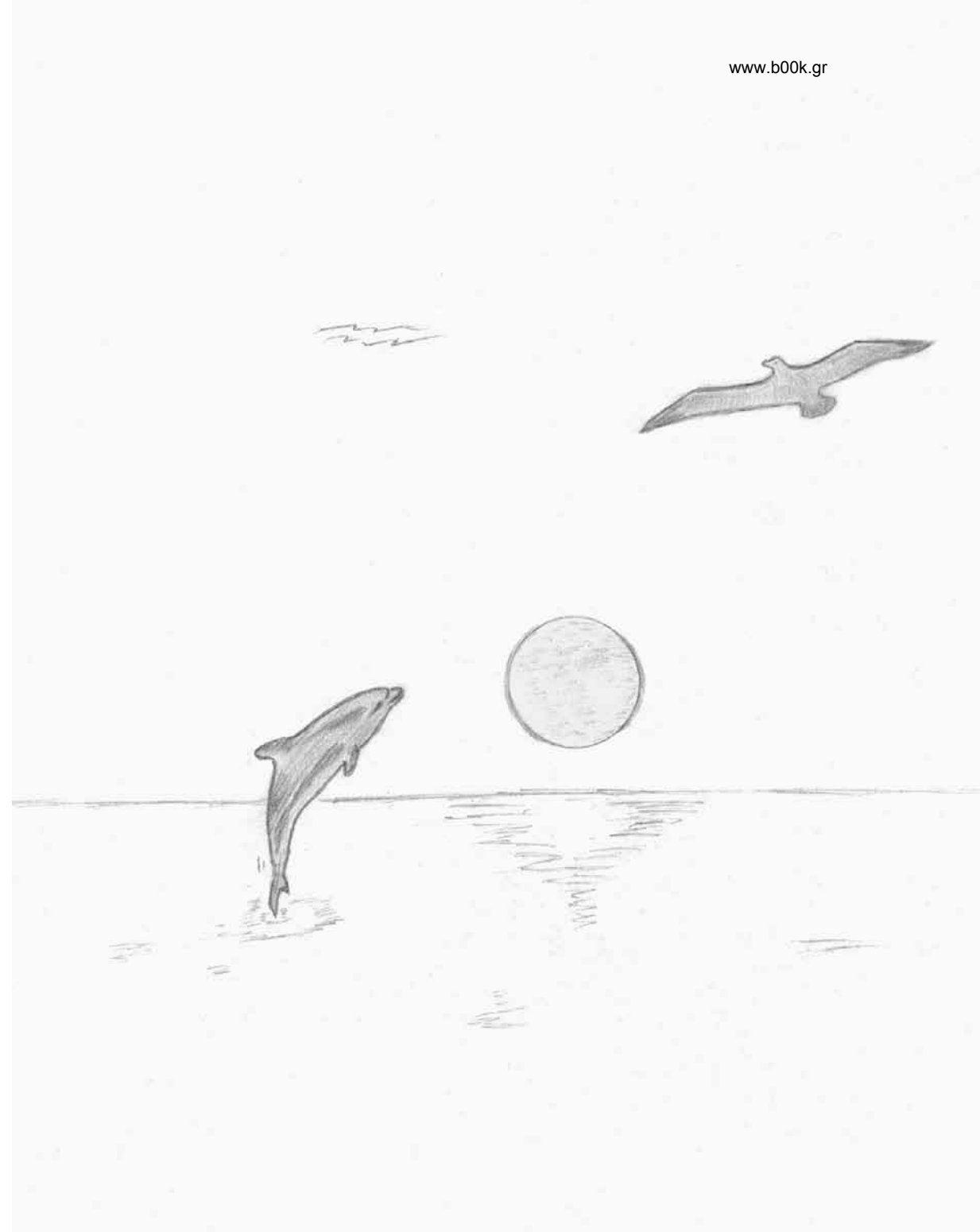
(本文外の文章)

—印刷されるページは書籍の様式ではありません。

—ページ数はP D F形式のファイルのみ追加されています。

—文章およびデザインは読者のためだけのものであり他に使用されません。

ある素朴な物語…



二つの太陽が出会う時
その時二つの世界は
永遠に融合する。

イルカとカモメ



叔父へ…

文：三月～六月
絵：七月～十月

* * *

太陽がもはや沈んだ頃ひとりで飛んでいた。

羽を大きく広げ、その体がゆっくりと上昇するに任せ、自分の天空の世界を急ぐことなく、ひとりで飛んでいた。

そしてその視線は深い赤に色付いた——消えた一つの太陽から借りた——部分へとほどけるに似たその晩の雲の塊へ随分長い間忘れられたまま向けられていた。

雲の下、低いところに、海。浪打、順に空の暗い色を映し恐る恐るそれを変化させ、そうしてより赤か紫に見えるかもはや区別するのは不可能になるに至った…

徐に、理由もなく、自分の小さな体をそれに向けて灰色の羽をほぼ閉じた。

今やそれがますますより速く回転するのを、危険に拡大するのを、目を閉じる前に、暗い水に消える前に見ることが出来た。

...

いきなりの潜水の後もまだ濡れたまま、飛んでいた。

よく知った一つの世界、見知らぬ一つの上を、ひとりで飛んでいた。

自分を招いているような一つの海…

* * *

—アレクサンドロス！

頭をひねるともう一羽のカモメが近付いてくるのが見えた。どのように時間が経ったか気付いていなかった。

—鳥は暗闇に飛ばない、知ってるだろう…
—はい、お父さん。我を忘れて。

出発した島の方へ戻ろうとゆっくり向かい始めた。
—息子よお前はもはや成長した、それは判る。暫くしたらお前は自分の人生を生きるために私達を置いてゆくだろう。だがまだ心配だ。

—お母さんがよこしたの？
—そうだ、そしてお前を見つけたら少し注意するよう言われた。
—また同じ話…

小さな島に近付いた。既にぼんやりと海岸の近くにカモメ達の集落が広がるのが見て取れた。島の様々な位置に立つ岩々は薄暗がりにより荒々しく、近寄りがたく見えた。

—彼女は正しい、アレクサンドロス。お前は何にも興味がないみたいだ。

ずっと飛んでいるが、目的がない。海に飛び込むが食物を探さない。自分の家族を持つ日が近付いている

のをちっとも考えていない。

気を付けなさい我が子よ。気を付けなさい自分がどうなるか。

夜は素早く更け、一方で月は弱々しく昇っていた。

…ひょっとして何かお前に欠けるものがあって私はそれを知らないのか？言っておくれ…

彼等は殆ど盲目に着地した。それでも彼の母親は難なく彼等を認めた。通り掛かりに集落の半分を起こして、彼等の方に 芽もなくやって来た。
実際、辛い一夜であっただろう。

* * *

何度やっても彼はいつも同じ熱意を感じていた。
絶えず上昇するスピードを伴う水が裂ける感覚は彼に熱意をもたらした。そして水面下に一瞬消えたとしても、直ぐ再び完全にコントロールされた跳躍をして現われた。

彼の後ろには仲間たちが続いていた。
恐らくイルカの集団の中でも彼は最も速く柔軟で、魚を捕ることも、独創的な見栄えのする跳躍でも最も有能だった。

その時彼等の右の群れに気付いた。
初めは一つ、そして次には皆がそれに向かって旋回した。

幾つかは魚たちを取り囲もうとする努力から既に前方を開きつつあった。

魚たちはもっとゆっくり反応した。他に選択肢もなく逃げようと円の唯一の開いた部分へと向かって向きを変え、腹を空かせた、明らかにもっと素早いイルカ達にただ降伏するだけだった。

もう一度だけ、「小さい方の魚たち」が不平等な自然の摂理に服従する傍ら、もしかして自分自身よりも優れた生物を滅ぼしているのではと疑問に思っていた。

その日の残りずっと、ほんの少しの休憩で、彼等は自分達の以前の遊びを続けた。そうして、晩になると、夜の静けさに身を任せるために集まった。

一頭だけ、ところが、集団から欠けていた。しかし誰も心配しなかった。

その奇妙な習慣をもはや知っていた。

* * *

苦勞することなく水の表面上に高く浮いて、再び日没を観察していた。

赤い楕円の円盤のように太陽はゆっくりと海に向かっていった。毎日の終わりはそして恐らく最も美しい瞬間だった。

そのように去る日への悲しみは減っていった。そして時にはもはや忘れることの出来ないその日没のお陰だった。

...

バシャンと、何か重いものが水に落ちたようで、いきなり彼の注意を引いた。

彼から随分もっと左、穏やかな海の上に幾つかの輪が開くのを認めた。

殆ど直ぐに一頭のイルカが高く跳び、ほぼ同じ地点に、印象的な回転をして背骨から落ち、同じ音を残して遠くへ旅立つために。ずっと遠くへ。間違いなく彼の島まで、多分——誰が知るのか——陸地まで。

いつもどおり徐に、恐らく弁解もなく、孤独な予期せぬ訪問者に向かって飛び始めた。

彼の考えは全て一瞬で散り散りになった。

—やあ！イルカ！

自分に呼びかけるのを待っていた——ほぼ確かに再び跳ぶだろう——次の跳躍をする時に。

イルカは、視線を熱球に向けたまま、驚いた。素早く頭をアレクサンドロスの方に向けた。

そのダイブは彼の最良の技能を示すものではなかったに違いない…

「はい」、水面につやつやと現われながら、ただ言った。

アレクサンドロスは微笑んだ。

—ごめん。

君を驚かせたくなかった。君のダイブを見て君に近付きたかった、君に話しかけたかった…

—だけどカモメたちはこんな時間に飛ばないと思っていた、彼等の島からこんなに遠いところで！

そっとイルカの隣に降りた。

それはもっと聞きやすくなるよう、軽く横に寄り掛かった。

—太陽が沈むのを見ながら、一人で飛ぶのが好きなんだ。

—あの高いところはきつととても美しいに違いないんだろうね。

—うん、確かに…

水を見た。

—…何が起きてるんだろう、ここよりずっと下？何

処も同じように暗いの？

沈む太陽には何が起きているの？

—知らない。あちこちが闇だけれど。光はない…

—本当？

君の世界には月もないの？

せめて星は？

否定的に首を振って答えた。

西の向こうで太陽は海に触れようとしていた。

カモメのほうに向き直った。

—飛んで… お願い、飛んで今あの上からはどんなか言って。

せっかちなイルカにすぐにまた近づけるつもりで空に昇った。

—高い処からは二つの太陽が水平線の端で出会っているようだ。はっきり見える方ともう一つの方、同じように、真っ赤な、少しの間水の上に浮いている。

そのまま殆ど海の色に溶けていくかのような。

イルカは「もう一つ」の太陽を求めて出来る限り高く跳び始めた。

—見えない… 全然見えない…

自分が見ていたのと同じ方法で世界を見ようとして
いる一つの生き物に気付いていた。

自分には見ることの出来ない世界を見ていた一つの
生き物。

「心配しないで」、その時彼に言った。
「僕に何が見えるか君に言うから。」

「僕は君のために飛ぶよ…」

一瞬の沈黙が続いた。消え入る先に融合する二つの
太陽の前にゆっくりと水の輪が咲いた。

—僕も君のために泳ぐよ…

そこで、一つの太陽がもう一つをますます貫いてゆ
く最中、二つの世界の物語において最も美しく、最も
不思議な取り決めがなされつつあった。

今や一つの新しい太陽が現われ、予期せぬ出会いの
誕生。

そしてそのようにして二つの部分が調和しつつあ
り、もはやどちらの部分も空に属し、どちらが海に属
するか確信を持って言うことはできなかった。

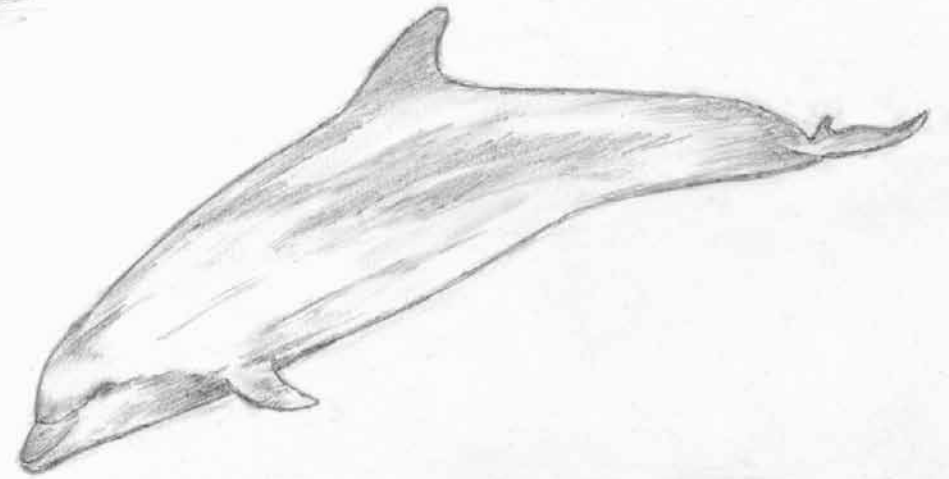
どちらの太陽がどちらを映していたのか…

...

—君の名前をまだ訊いていなかった…

—アレクサンドロス。君のは？

—イアソン…





* * *

新しい日の夜明けと共に東の岬に向かって飛んでいた。

その島の端でイアソンは既に待っていた。殆ど水面に触れながら、ゆっくり泳いでいた。

—おはよう

—おはようアレクサンドロス。

昨夜は無事に着いたかい？

—うん、夜間飛行にはもう慣れている…

月の光で充分だ。

沈黙が広がった。

—僕等は言うことがあまり沢山あってそれでどこから始めるか知らないみたいだ…

しかし出だしは結局見つかった。終わりのない会話が、こうして、始まった。

イアソンは耳を傾け、一方アレクサンドロスは今まで想像したことのない世界に、その羽を見たこともない形に合わせていた。

深い森、風車、家々と道、陸地に住む動物たち、大きな色の付いた畑…

そしてアレクサンドロスは、自分の番が来ると、海

はその深みの中に海綿や、珊瑚や海草や、豊富な大小の、有害無害の生き物からなる色とりどりの世界を隠していることを今まで想像したことがなかった…

…

それでも、彼らがなによりも好きと思われたのは、アレクサンドロスがイアソンのために飛んでいる時だった。彼がカモメであつたら、飛びたかってあろう場所へ。

或いはイアソンがアレクサンドロスのために泳いでいる時、もし彼がイルカであつたら、潜りたかったであろう深みへ。

その後自分達の経験、感情を分かち合っている時。

…

彼はたった今自分のために小さな島の上を飛ぶのを見ていた。その二つの細い目には、羽を大きく広げ、高く飛んでいる一羽の海鳥が存在するに過ぎなかった。

少し後で同じ献身をもってどのように島を見ていたか描写するのを聞かろう。岩が海岸まで届く全体像、水が最初は緑色で、続いて暗い青に。

風が強く吹いいても彼を引き込まない時、空に、苦勞せず、不動で留まる時どのように感じているかを。

何度も何度も尋ねていた、絶え間なく。

そしてアレクサンドロスは何度も何度も海はどのように見えるか言っていた——そこから遠くを飛んでい

ると広大さは減り——陸地と水平線に弧を描いて。

空中にダイブする時旋回するのをどのように見ていたか、羽を軽く広げてゆっくりゆっくり速度を落とす時どのように感じていたか、直後にダイブしようと少し高度を上げる前に殆ど水に触れている時がどんなであるか。

ずっと語っていた、恐らく尋常ではない熱意をもって、飛ぶ感覚について。

上にいる時、物体から距離をとる時、それらがより遠く、より弱々しく見えるのを説明していた。そして細部は無意味なようだった。

高いところからはより大きく、より優越して感じているかを。

距離が失われるほど再び別のカモメになっていった…

高く飛ぶ時、繰り返した、細部は無意味なようだ。そして高く飛ぶ時全ては細部のようだ。

イアソンはそこで、彼の隣で、その時目を閉じて自分自身を高いところから見ようと努めた、岩を高くから、小さな島、取るに足らない、海に包まれた——最初は緑、続いて暗い青…

…

その後彼は休むことなく話すだろう、恐らく尋常ではない熱意をもって、泳ぐ感覚について。

海に深く進む時、徐々に速度を上げ始めている時、いきなり体を表面に向けている時、最終的に宙に跳ぶ前に雲がますます速く何らかの形を取っているのを見る時、どのように感じるかを描写していた。

アレクサンドロスは何度も何度も尋ねていた。

何度も何度もイアソンは、水の中にいる時、彼の中のどこかで『浮いて』感じる時、その動きがもっと遅くなる時を話した。それぞれの瞬間は持続するかに思える。

そして時間はもはや無意味なようだ。

アレクサンドロスはその目を閉じて、たった一瞬でも、海の深みの何処かに迷い、ある違う世界を、感じようと努めていた。

場所と時間に束縛されぬ一つの世界…

彼は今波のない水面に静止してしていた。

イアソンが自分のために泳いでいるのを、彼自身には禁じられた深みへとゆっくり遠ざかって行くのを、海の色と一つになるのを見ていた。

そしてここでも距離は現実を変えていた。

待っていた、やきもきと水の中を見つめながら。近付くのが見えるまで。

光を現われる影のように、おずおずと何らかの形を取った。その時嘴くちばしに何か持っているのを見た。そのようなものを見ているのは初めてだった。

やがて島の内地へと飛んでいった。

イルカとして花を見たことはなかった。

そのように、アレクサンドロスが近場の岩のどれかに置かれた一つの貝殻を観察している一方で、彼は初めてそんなにも繊細な、そんなにも脆いものを海の中へ運んだ…

…

同じような仕方でその日の残りは過ぎた。静かに、話し合いと叙述と、ふたりの奇抜な遊びと、彼等の感覚、感情を分かち合う努力との合間に散りばめられて。

今やそれぞれが相手の目で見られるようになり、彼等自身が自分達の世界をより美しく見られるようになった。

その新しい側面を発見できるように。
以前には気に留めていなかったものに注目出来るように。

今や一人がもう一人の目で、調査の、探求の態度で見えており、自分達の世界についてどれだけ僅かに知っていたかを今一度意識していた。

如何に空しく全てのうちの無限小な一部に執着していたか。如何に些細なものに固執していたか。

決心は既につけられていた。
明日一緒に旅立つ。
海の端にある大きな島へと旅立つ。陸地と呼ばれる島へ。

その夜カモメの集落全体が一羽の母親の無言の訴えにまんじりとしなかった…

空で小さな旋回をした。父親と兄弟達は島へと戻って行った。

母親は先に別れを告げていた。とても疲れていて飛ぶことが出来なかっただろう。

誰にもイアソンのことは話さないことを選んでいった。

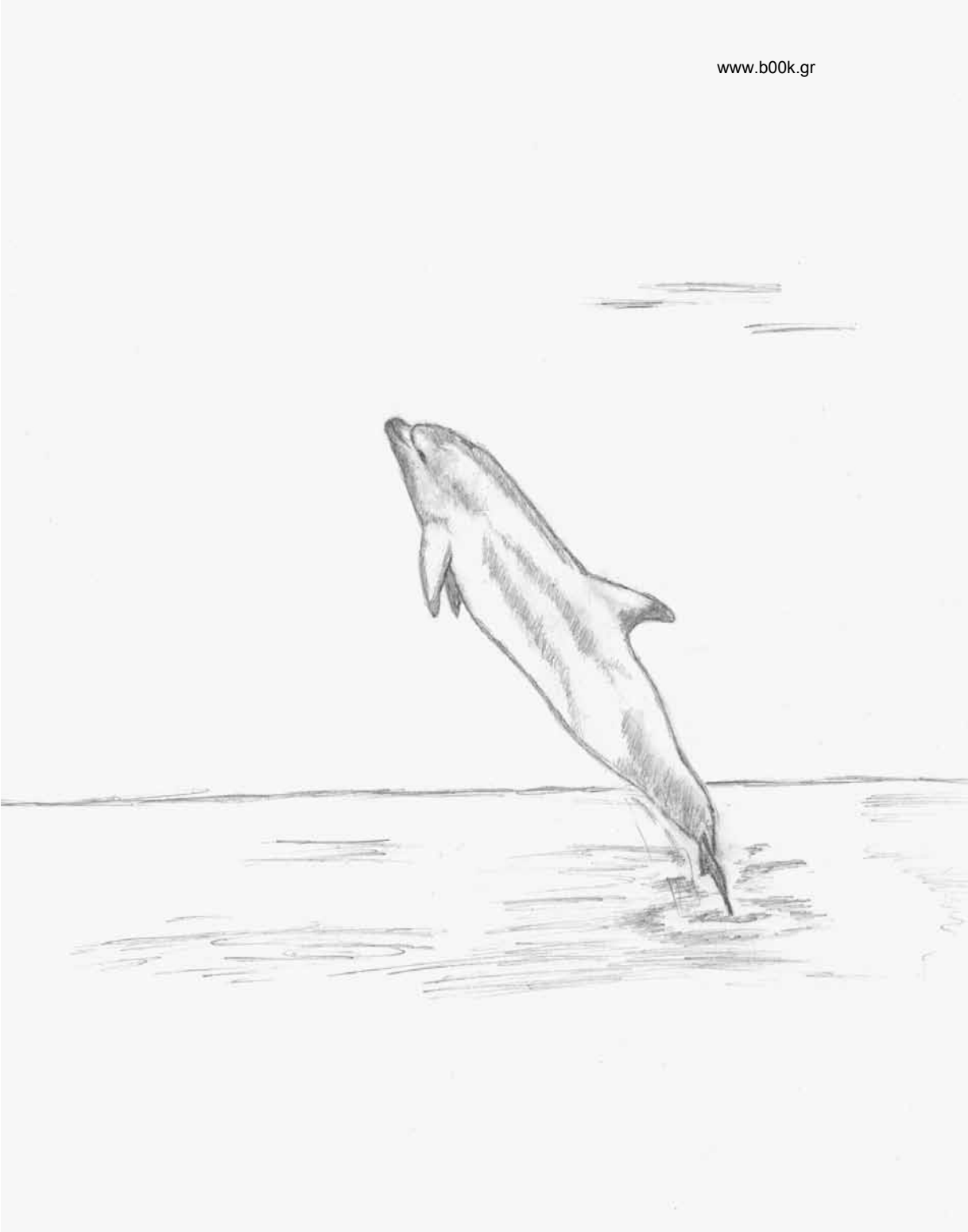
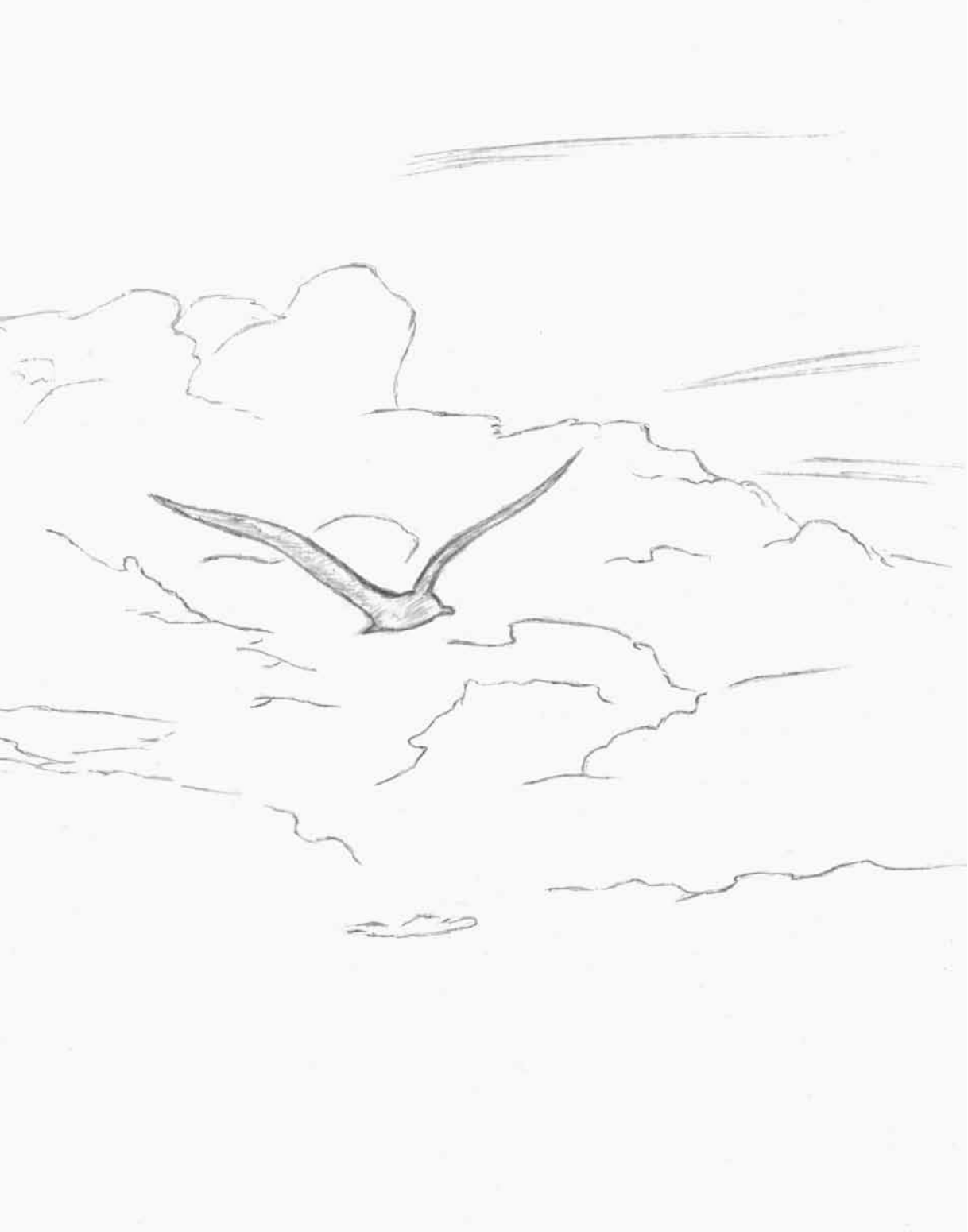
彼の母親には言わなかった、恐らくただそのようなことが彼女を慰めはしないからだった。一頭のイルカがある日助けを必要とする時、どのようなことにも力になり、彼を助けるのはありえなかった。

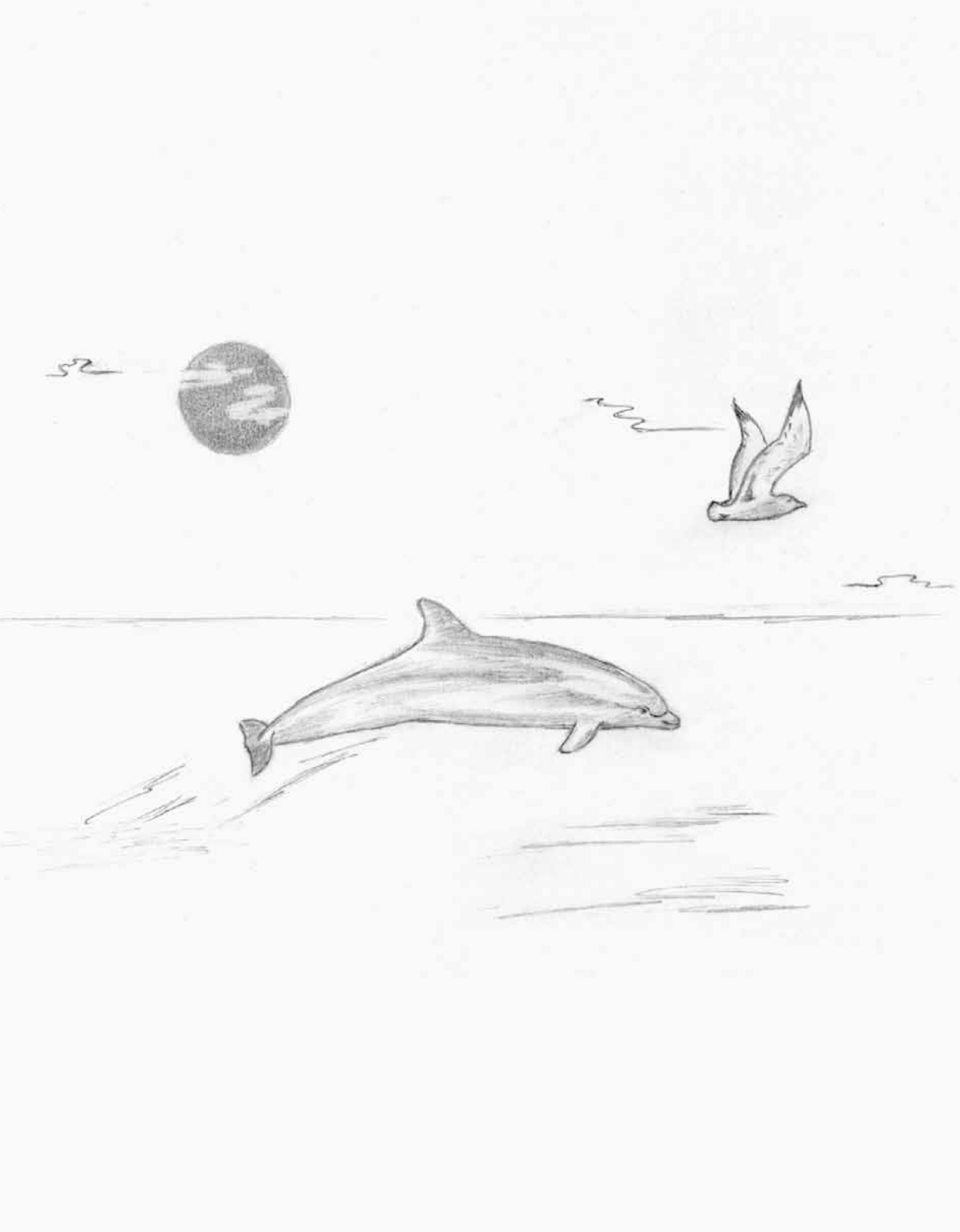
父親にはただ、陸地に向かって行こうとしている一頭のイルカと一緒に旅をすることを述べただけだった。それ以上は何も。

「お前を遅らせる、知っておくように…」
「構わない、お父さん…」、弁解した、「誰かお供がいる。」

他の者たちには、彼が去るのを見た全ての者たちは、ただの偶然に過ぎなかった。そのイルカは、時折小さな跳躍をしながら、アレクサンドロスと同じ方向へと速く泳いでいた。

より多くを知ろうと熱望する二人の若者でしかなかった。学ぼうと熱望する二人の若者。
生きようと、そのように、熱望するところの。





* * *

そのような天候では陸地に着くまでに少なくとも二日は必要だっただろう。二人が飛ぶことができる殆ど一日分多く。

主にイアソンが泳ぐ速さに疲れている時、たまに休みを取るのみで、絶え間なく進んだ。

一羽のカモメについては、恐らく相対的に遅く飛ぶのはもっと疲れさせた。しかし先を飛びたくはなかった。泳ぐ友人を注意するのが好きだった。

一緒にいるとを感じるのが好きだった。

...

かなり小さかった頃、何時だったか正確に覚えていないが、アレクサンドロスは陸地に一度旅したことがあった。

その時、父親と兄弟達と共に、弱さを感じた時彼等に約束した。

短いわくわくする日々のうちもはや残っているのは色あせた映像のみで、どれが彼自身見たものかどれが年長のカモメ達の叙述の記憶から創り上げられたものか区別することも出来なかった。その全てのうちで海の端の島はおとぎ話のように語られていた。

自分で何が存在し何が存在しないか、他人の真実と自分の真実を識別する時が来ていた...

イアソンは、彼の側から、その時まで外海を、陸地やその住民から遠く離れて泳ぐことに慣れていた。海に沿ってそんなに彼等の近くは初めてだった。

...

並んで晴れ渡った空の下に休んだ。

疲れて水面の、彼等の旅を遮断する、彼等の可能性の大きさを決定するその広大な線に触れていた。ほんの少しだけでも渡る事の出来ないその線。しかし未知を味わう限りは充分だった。彼等にはなかったまさにそれを求めるには。

もし岩々のように強固で通り抜けられず、砂と土のように不透明に伸びていたら、その時は何を損していたか決して知ることはなく、より多くを学ぼうと決して求めなかった。

この共通の境界に、さて、ともかく名前を付けなければならなかった。

しかしどの名前も的を外しているようだった。一方が提案するものをもう一方は拒んだ。そして最後には何処にも至らなかった。

「どうして単純に線では駄目？」ある時点でイアソンが尋ねた。

—単純すぎる…

—分離線は？

アレクサンドロスが水平線に届く水を見て、微笑み、同意した。

そうしてまた出発した。彼等自身とその世界を分離する線に平行して旅した。分離線に平行して。

恐らく二人の境界を名づけてしまった今、もはや知ってしまった今、恐らく今それに打ち勝つことが出来る。

* * *

彼等はずいていた。
進んでいた経路上にはぼ——辛うじて、殆ど僅か、
少し右に——今や一つの島が見えていた。
近付いている夜の安全な待避所で、一方太陽は退色
した金色に海に向かって傾いていた。

島の近くに着くと巨大な岩々が雄大にそそり立っ
ているのを見た。
そしてそれらは金色に、光に色付いていた。

大地は最初唐突に浮かび上がり、端々が割れ、その
後平らに、波打ち、隆起する前に再び平らな島の頂ま
で妨げられることなく続いていた。そこへとアレクサ
ンドロスは向かっていた。

彼が飛んでいるのを見ていた。
岩の塊に挑みながら、一つの白い点が風に滑って
いた。
波状の高み、鋭く切り立つ岩々や、穏やかになった
頂を通りながらますます高く飛んでいた。

山々の後に消えてしまった。

沈む太陽は斜面の間の雰囲気をも不思議な霧へと変化
させていた。

その中で色や音は消えつつあり、動きは鈍くなり、
あらゆるものが今一度取るに足らない影になりつつあ
った。

小さな家々の上を飛ぶ彼の姿だけが際立っていた。

そして彼の叫び声が思いがけなく拡散される沈黙の
音を強めた。

至る処に広がり、空間に満ち、その源に還る前に、
穏やかにあの霧に捕らわれ消える前に、周囲の岩々を
波のように打った…

その後平らな頂へと飛んだ。

...

太陽がもはや沈むと、彼等は島の別の側へと向かっ
ていた。
闇を進みながら小さな湾の端へ辿り着いた。

そこで、村の前、半分閉め忘れた窓の仄暗い灯りの
前で、疲れて眠り込んだ。

その後自分の世界を探索しに姿を消した。それでも釣り船には近付かなかった。

* * *

網をかき寄せる一艘の漁船の物音で目が覚めた。喘ぎながら進みそしてその音は海と空に激しく伝わっていた。

その背後にカモメ達の雲が来ていた。
叫び声と羽ばたきの中で——彼等の針路を残りのカモメ達の針路と明確にしながら——水面に上がってくる小さな魚達に、或いは船の人間達が無用と捨てたものに飢えて飛び込んでいた。

分離線に現われるや、彼はイアソンの隣に行った。
一日は既に始まっていた。

...

斜面に村が、白く、光に満ちて広がるのを見た。
その近くの岩だらけの湾の後、砂浜に岩々が席を譲るところへ進んだ。まだ朝であり、全てが静かに見えた。

アレクサンドロスは船とカモメ達の方へ向かう前に、再び小さな家々の上を飛んだ。

イアソンは、逆に、家々の植木鉢や青葉、青い窓や手すりに囲まれたバルコニーを観察しながら、まだ少し村の近くの海面に留まっていた。石の階段の道や、高い鐘楼のある白く塗られた教会を見ながら…

...

群れの少し後ろ、そのずっと上ではないところを飛んでいた。

彼等の周囲には海がある時にそのように食物に奮闘するそれら全てのカモメ達が彼には奇妙に思えた。そうして彼等を入り混じった感情で見つめるに留まった。

その時、予期せず、彼等の一羽が群れから離れて彼の方へと飛んで来た。

「おはよう」、彼の近くに来るや優しく見知らぬカモメは言った。

—おはよう！

「君はここの？」、続いて尋ねた。「島で君を見たことがないと思う…」

—ただの通りすぎり。かなり遠い島から僕らは来た。

陸に向かっている。

—「僕らは来た」？君は他のカモメ達というの？

アレクサンドロスは無意識に微笑んだ。

—ちょっと違う…

...

「そんな奇妙な双子は見たことがない！」ふたりの友人の間を泳ぎながら、ペトロスは冗談っぽく告白した。

- ここに住んでいるの、それとも君も他所から来た？
- ここで生まれてこのかた殆どここに住んでいる。

とても美しい島だ。時々陸地に飛ぶけれど、いつも戻るよ。

ここに僕の友達、親族がいる。

彼等は避けた——恐らく理由も知らず——陸地に関するあらゆることを訊くのを…

「このもっと大きい白い家々は本当に何なの？」イアソンは言った、多分話題を変えて。

彼等は村を見た。

アレクサンドロスは彼自身が今まで高みから気付いていなかったことに彼の相棒が注意したことを不思議に思った。

「知らないの？」

「この大きな白い家々のそれぞれは、神様の家だ」、ペトロスが答えた。

一瞬の困惑が続いた。

—カモメの神様？

「それともひょっとしてイルカの神様？」イルカが付け加えた。

その問いを待っていたかに見えた。

「カモメの神様もイルカの神も存在しない」静かに彼等に言った。

「人間の神様も存在しない。ただ一人の神様が存在する。名前には無関係で。

この大きな白い家々は彼の家だ。」

「それでこれらのどれかに住んでいるの？」アレクサンドロスは食い下がった。

ペトロスは察して微笑んだ。

—全てに住んでいる。あそこと僕等の中に。雲の中に。海の中に。一番小さな砂粒の中に。

彼が全てを想像したと君等は知っている。僕等の周りに存在するあらゆるもの。

彼が全てを知っている。以前、現在、その後…

友よ、僕等の人生で行う悪事は罰せられる。善行は報われる。

僕等が去る時彼が僕らを裁く…

その目には言葉にあった同じ穏やかさが広がっていた。

...

—どうして？

「“どうして”とはどういう意味？」、イアソンの方を向き見つめながら訊いた。

—どうして彼が僕等を裁くの？

—どうしてって僕等は彼のものだから。彼に属するから。

彼が僕等を創造した…

—どうして？

—“どうして？… どうして？…”

—どうしてか訊かないで。彼を信じる者はどうしてか訊かない。

—どうして？

「しかし彼は知っていて僕等ではないから！」、世界で一番単純なことを誰かに説明しなければならないことに驚いて言った。

「ところでごめんなさい」、付け加えた、「けれど行く時間だ。」

羽をはばたかせ二人の旅人から少し上昇した。もう一度彼等を平穏に見つめた。

「友よ、彼を信じなさい」、彼等に言った。

「いつも君等に良いことを望んでいる。」

木製の漁船は、網をかき寄せてしまっており、村の端の棧橋に近付いていた。

それに向かって再び飛んで行った。

「いつも僕等に良いことを望んでいる…」、アレクサンドロスに物思わし気に繰り返した。

「同じことをいつも僕の両親も望んでいた。」

「けれど決して、多分、どれなのか分らなかった。」

…

彼等は外海へ出発した。

彼等の後には船が棧橋につながれていた。

* * *

彼等の出会った島は既に消えて陸は少し遠くではなく思えた。

彼等の上の空は至る処がグレイの色合いの雲に覆われていた。海は穏やかで、それも灰色だった。

二つの影、一つのガラスの世界に迷い込んだ二つの影、すこぶる無音で無色なある日。空と海の境目が消えそうなある日…

並んで旅した。広大な分離線の鏡にそれぞれがもう一人の鏡像のようだった。

彼等是一緒だった。そして一緒にいる限り並列して存在した。同時に二つの世界で、海と空で、一つの生き物のように、全体のように動いていた。

同じ瞬間に原型であり鏡像であった。そうして鏡の両方の側に生きていた。

...

彼は高く跳び上がった。

出来る限り。

その後中に止まって降り始め、結局尻尾から落ちた。

その時アレクサンドロスが空に昇った。

思っていたより恐らくもっと速く実際には降りて開きかけた羽を軽く回転させた。

長めの旋回を始め円を完成するに至り——いつも通りまた——そしてその後飛び続けた。

イアソンはそれに相当する何かを試みた。完全な旋回をしながら宙に跳んで再び海に飛び込んだ。

...

今や隣同士、分離線の上をふたりっきりで浮いていた。

間違いなく疲労しており彼等の遊びも、持っても少しで、彼等をより疲れさせた。出発する前から知っていたがそれは彼等を妨げなかった。寧ろ恐らくその方法によって旅の単調な動きから体を楽しむのによかった。

隣同士、分離線の上をふたりっきりで浮いていた。二つの灰色の筆さばきが、何処でもない真ん中に残されていた。

...

「何か聞こえた？」沈黙を破ってイアソンが尋ねた。

—ううん。何が聞こえるって？

—遠くから何か唸り声みたいに思えた。

彼が言い終わるや、同じ音が再び聞こえた。その時はアレクサンドロスも聞いた。

彼は空に急いで昇った。向こうの雲が、陸地の近くに、更に濃くなり、もっと暗くなっていた。

「嵐が来る!」、イアソンに叫びながら彼の方へ向かった。「先に進まないで…」

彼はその倍だけ動揺しているようだった。
「急いで飛ぶんだ! もたもたしないで… 今行くんだ! 行くんだ!」

...

手際よく羽を動かしながら、絶え間なく速度を上げながら水表面の少し上を飛んでいた。海はゆっくりゆっくり新しく生まれた漣に割れていた。

信じ難い程速く飛んでいた。風のように進んでいた。しかしそれは反対の考えがあるようだった…

波が高まるにつれより高く上昇するはめになった。風は絶え間なく強まり、時折風向きを変えた。雨の匂いが今や彼を包んだ。

午後が夜になった。
稲妻の光で夜は昼になっていた。

波のように降る雨にも関わらず進んだ。

...

水面を泳いでいた。泡立つ外海に対抗する一頭のイルカ。

まさにその波の上を滑りながら、出来る限り、高く跳んでいた。どれか稲妻がまた海を照らすのを望みながら。

...

陸地は今やとても近かった。そして風はようやく彼に向かっていた。

しかし雨は常に強まっていた。そして羽は彼を裏切った…

疲れ果て水に落ちた。

* * *

太陽はもはや落ち着いた空に輝いていた。穏やかな海、決して目覚めなかったようにいきなり静まった。

しかし岩々は前の晩に何か起きたことを示していた。

土はまだ雨の匂いがしていた…

一日中彼の名を呼んでいた。一日中。

注意深く岩々を見つめた。探しているところからあまり遠くない筈と信じていた。そうして探し続けた。

見つけたカモメ達に彼を見たか尋ねた。一緒に探してくれるよう、見てくれるよう、助けてくれるよう頼んだ。

しかし彼等は他にすることがあった。直ぐに試みを放棄して食物を見つけに外海へと去っていった。

朝は午後になった。午後は晩になった。

その後夜が再び訪れた。

岩々を一人残って見つめる一方月が海に影を落とした。

聞こえた——弱っていると想像していた——かなり遠くから来る音が。彼は呼吸をほぼ止めて沈黙に耳を傾けた。その時再び同じ音を聞いた。

境界線上を伝わって、夜の中に囁きのように遠く聞こえた。誰かが彼の名を呼んだ。

強く答えたかそっと答えたか分らなかった。ただまた再び泳ぎ出したことは分った。水を裂くことがまた再び意味を持ったと。

彼のためにまた再び泳いでいたと。

* * *

新しい一日が始まった…

そこにある岩の近くに泳いでゆくと、彼が眠っているのを見た。

波が彼の羽を洗い上げていた。そして塩が傷の世話をしていた。

目を開けた。その時になって彼の隣に行った。

—痛む？

—あんまり。

彼の体は擦り傷だらけだった。最終的に彼をそれらのどれかに打ち上げる前に、波は彼を何度も岩々にぶつけた。

彼は羽を広げようとしたが、右の羽の強い痛みで止めた。

—折れている？

—そうは思わない… 全く動かせなかった。

多分裂けたのだ。或いは骨のどれかが外れてしまった。或いはただ打ち身から痛んでいる。

知らない…

けれど飛べない。

—心配しないで、アレクサンドロス。きっと大丈夫…

続く日々は予想したより早く過ぎた。

海が荒れる日には不器用に一番高い岩に登った。海の風いだ日には不器用に水に落ちて泳いだ。

話し合いながら一緒に進んだ。

ゆっくりと進んで疲れている時は止まり一番近くの滑らかな岩で休んでいた。

その時イアソンは海底の品々を持ってきた。

見つけた一番綺麗な貝殻、小さいのや大きい、硬いのまたは脆いのを注意深く^{くちばし}吻で持って彼に運んだ。全ての形の海綿、様々な色や形の珊瑚の一部を運んできた。

海がそこに属するものを再び楽に引き込める処、水際の岩々にそれらを置いた。

それから進み続けた、陸地に平行して。

…

アレクサンドロスが海に飛び込む時旋回していたように、絶え間なく体を回し、彼の前を泳いでいた。

尻尾だけに支えられながら、ある時には華々しく殆ど水の外に佇んでいた。

或いは、逆に、友人に挨拶しながら、尻尾だけが分離線を通り抜けるようにしながら全身を隠していた。

そして彼が求めれば高く跳んだ——出来る限り高く——海が彼を再び中に引き込む前に。

今や特に痛みもなく羽を伸ばして上下降出来るようになっていた。

...

岩から岩へイアソンが絶え間なく海での生活について描写するを、陸地での生活について他にも話したいと求めるのを聞いた。

岩から岩へイアソンが彼自身には見るのが不可能な海底の特異さについて全て描写するのを聞いていた。

水のより深いところに沈んだ船、折れたマストや腐食した竜骨。恐ろしい黒い裂け目のある小さな洞窟の内側。海の中で真っ直ぐに開く溝——広大で、闇に満ちた。

そして殆ど全ての探求でイアソンは友人へ持ち帰る何か違うものを見つけられた…

決してそれ以前にはどのカモメもそれほどに惑星の大きな青い部分を学んだことはなかった。

決して恐らく、どのイルカも海のそれぞれの美しさの詳細について知っていたことはなかった。

...

まだ少しのあいだアレクサンドロスはいアソンが急な頭の動きで陸地へと投げる魚に養われるのが続いた。或いは友人の口から自分で取るより小さい魚によって。

恥じることはなかった。義務はなかった。

加えて二つの個々の存在があったことはいまだかつてなかった。一つの意味の二つの面に過ぎなかった。

視界の及ぶより向こうの世界を究明する意思。

...

強くなる風を無視しながら、再び広げた羽で飛んでいた…

* * *

川の入江で別れた。
高みからは望めば海に注ぐ川でないと信じる事が出来た。それは海が陸地を、裂きながら侵入していた。

アレクサンドロスはその源へと川を進むことになっていた。イアソンは彼等の遠くで夜に灯る灯台まで陸と海とのほぼ境界を泳ぎ続けることになっていた。
その灯台で再び会うことになっていた。

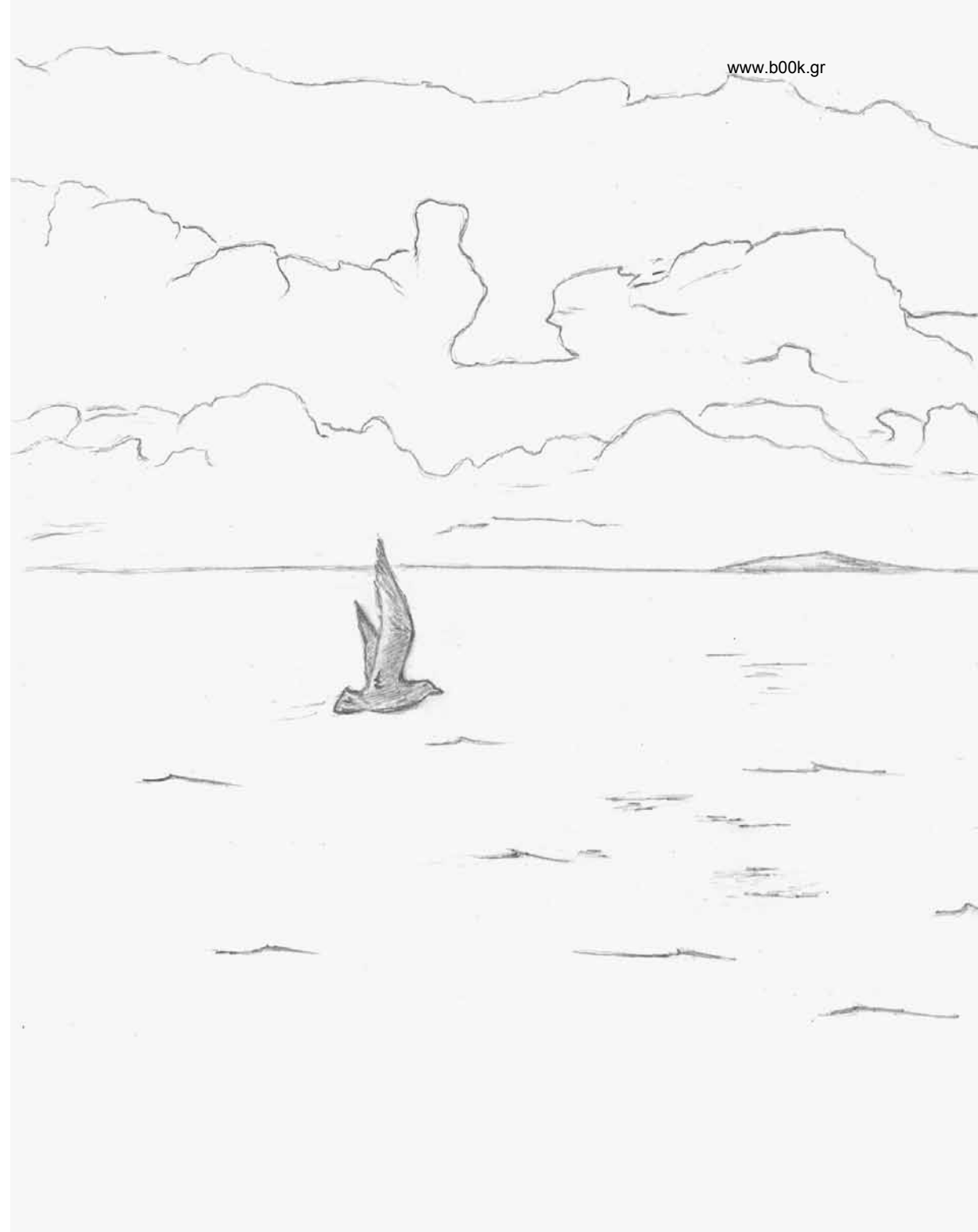
...

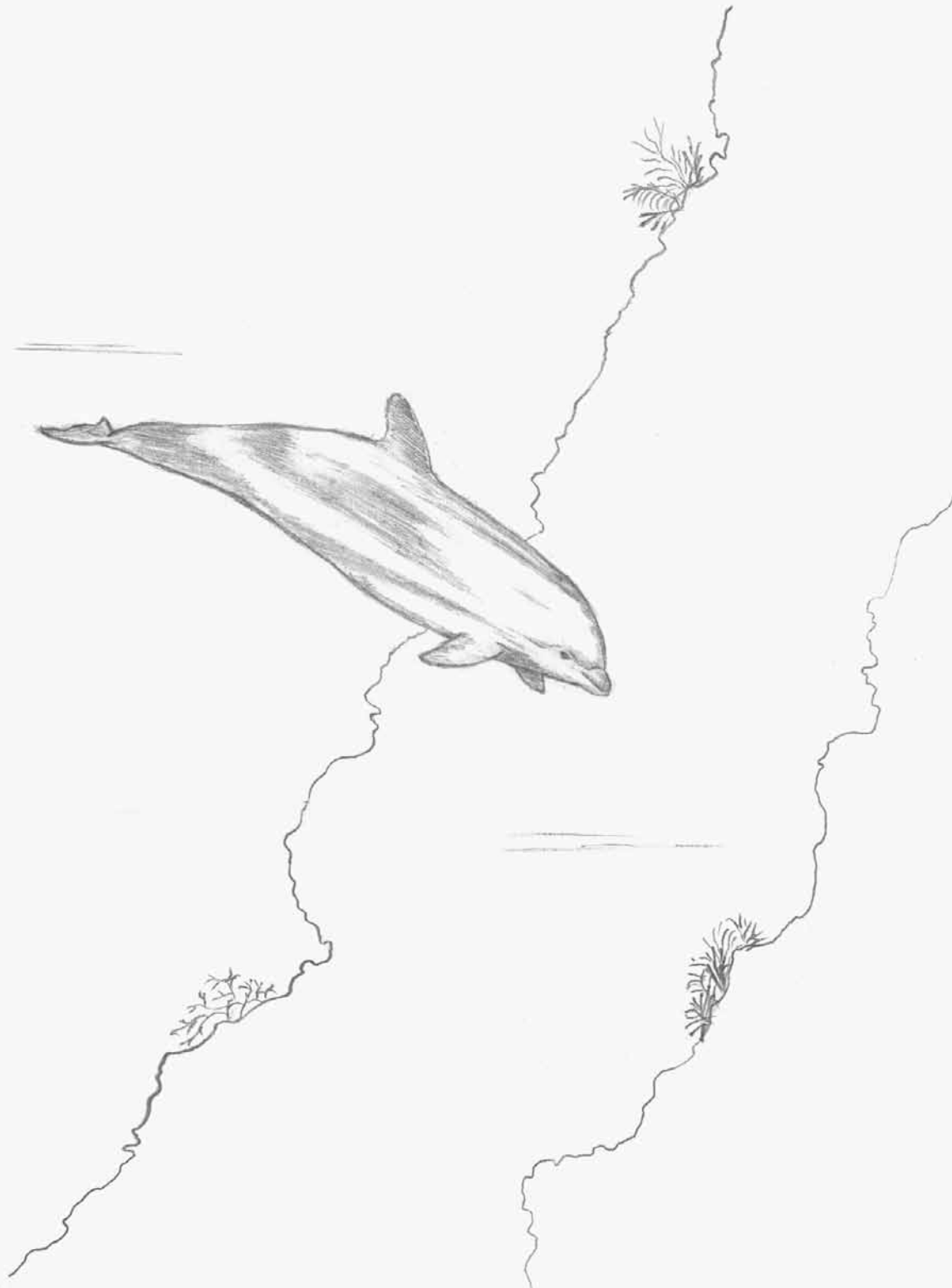
その古い石の灯台の近くでアレクサンドロスは自分が少し前に初めて見たものを描写した。
青い川が緑の群落の中に滑るのを。
白いやかましい滝が霧の中に虹を隠しているのを。

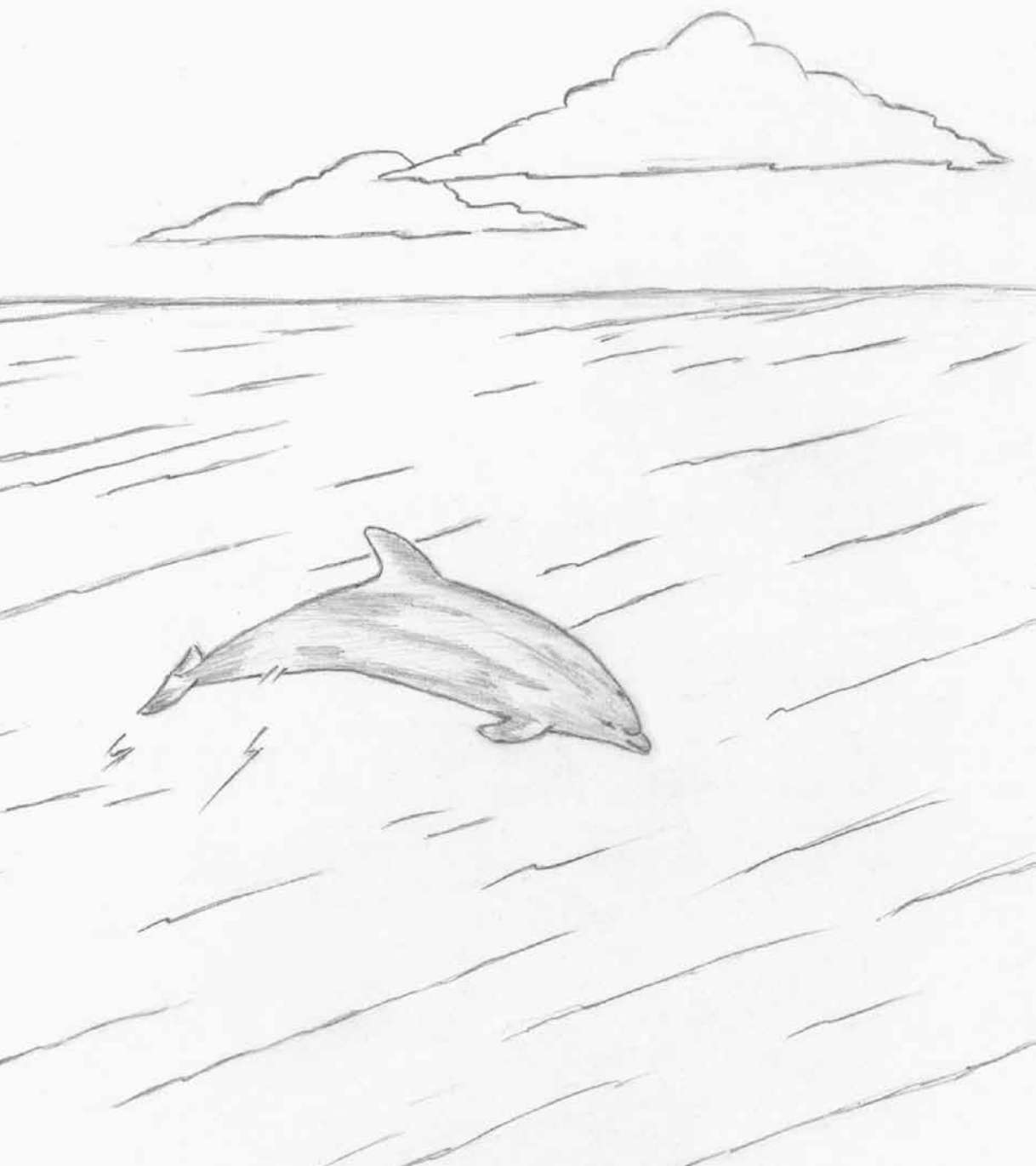
雲が鏡のような湖に映るのを描写した。
凍る山々に残る雪を。

古い灯台のどこか近くで二人の旅人が今一度その知識を伝えていた。彼等の感覚を伝えていた。

そのように、同じ記憶を分かち合っていた。







* * *

彼はそれを見た！

その細い体を海に広げていた。

しかし確かに最も危険なものであった。何故なら彼には見えなかったから。そして無用心にも彼はそれに向かっていた。

その感覚は突然鋭くなった。

その体を空に投げ出した。自分のいた位置から高さをかなり落とし、墜落を減少し、巧みにその羽を回転させた。

...

彼はイアソンの少し後ろを飛んでいた。その名前を呼んだ。しかし表面下で泳いでいる影は同じ速さを維持していた。

羽が殆ど分離線に触れている程、もっと低くした。まだイアソンの後を飛んでいた。何度も何度もその名前を呼んだ。

普通に考えて今にも呼吸をしに浮上するだろう。しかしもはや待てなかった——網は既にたいへん近くに見えていた。

より速く飛び始め、彼を追い越した。

その後、速度を落とさず、少しより高く上昇し、瞬間その体を旋回して垂直に水に飛び込んだ。

...

彼を避けるために始めた曲線を閉じながら、再び友人に近付いていた。

驚き以上のものだった。危うく衝突するところだった。

ほんの数メートル離れて止まり黙ってそれを観察していた。

最初にイアソンが話した。

—ありがとう。

アレクサンドロスは、まだ動揺しながら、大きく微笑んだ。

「見ただろう」、言った、「君を見守る一羽のカモメがいるってのを？」

「見たよ…」、答えた、彼も微笑みながら。

「…ただ残念なのは他の奴等は持っていなかった…」

網から視線をそらして向き直り彼を見つめた。後ろめたい視線を返した。

「本当に」、認めて、「君には僕の両親について話したことがなかった。」

その日までアレクサンドロスはイアソンの両親が仲間の残りのイルカ達の間にいると思っていた。

「僕はその時とても小さかった、覚えている…」

「浜の近くを一緒に泳いでいたが、僕はある間少し後にいた。彼等の叫び声を聞いた時僕は大きな茶色のクラゲと遊んでいた…」

「二人とも罾にかかっていた… それぞれがたいして離れてはいなかった。水面からたいしてもっと低いところではなかった。

逃げようとしていた。歯で網を切ろうとしていた。」

「僕を見るやまた叫び始めた。僕に止まるように叫んだ。

そしてやっと止まった時僕に逃げるように叫んだ。遠くに逃げるように。戻らないように。振り向かないように。ただ向きを変えて逃げるように、出来るだけもっと早く。」

「そこに凍り付いていた。」

「その後向きを変えて逃げた。

後を見ずに。」

...

「その時から二度と浜には近づかなかった。人間達には近付かなかった。

沖合いに向かった。そこで他のイルカを見つけた。そこで育った…

大海原とカモメの島々の間で。」

「彼等はよく言っていた、覚えている、僕の両親は死んでいないって、まだ海の何処かで生きているって。」

「彼等を信じていた頃を覚えている、アレクサンドロス。」

「恐らく彼等はまだ信じている…」

「いずれにせよ」、後に言った。

「誰も永遠には生きない。そして多分随分早くにそれが分ってよかった。」

...

暫く無言で進んだ。しかし感情はしばしば言葉で表現されることを求めた…

— 去ったことを後悔したことがある？ 僕等が去ったことは？

答えを待たず再び尋ねた。

— 何故去ったか考えたことがある？

イアソンは意外にも質問を返した。

— 君は何故？

「知らない」、アレクサンドロスは答えた。

「確かには知らない。」

「ほんの少ししか知らないでいた… そんなに多く学ぶことがあった… けれど他のカモメ達は僕を理解していなかった。」

いつの日かそうになっていただろうと思う… いずれ去っていただろう、ひとりであっても…」

「君は？」

— 僕は知らない、アレクサンドロス、去ったかどうか。多分決して何処にも属したことがなかった。自分の集団に実際に属すると感じたことがなかった。何処かに属すると…

...

その朝は風がなかった。しかし水は生きているかのように波打って見えた。

— …多分海自体のせいだろう。皆に属するけれど自分のために君が所有することは決して出来ない。

— 誰が知るものか、イアソン…

多分その方が好ましい…

— 一緒にいるには自由だった。彼等の永遠の旅を続けるには。

* * *

湾の砂地の端で暫く待っていた。やっと彼が辿り着くのを見るまで。

彼の隣に降りた。

動揺しているようだった。何かを内に隠しているようだった。

「僕にとって人生最悪の日だった」、静かに言うといきなりその目が霞んだ。

「何が起きたの？何が起きたの、アレクサンドロス？」

その時点でどう始めるか知らないように見えた。

「山々の後ろ」、やっと言った、「あの山々のずっと後ろ、陸地の奥だけれど海にとっても近く、ごみ捨て場がある。ごみだらけの場所だ。酷い場所だ。今日はそこにいた…」

「それで？」

変わらぬ動揺のまま続ける前にただ一呼吸するため休止した。

「全ての中で一番酷いのは、沢山のごみより、腐った肉のむっとする臭いより酷いのは、そこにカモメ達が住んでいることだ。

分るかい、イアソン？

カモメ達だ。」

「あのごみで養われているカモメ達。肉片や捨てられたパンで。人間の食物の残りもので…」

「臭いの気にならないカモメ達。果てしない山がもはや気にならない。そうやって生きることに慣れている。

空から遠く、低く飛ぶ。海から遠くを飛ぶ海鳥。それをもはや忘れている。

ただの食物の源だった。そしてここではこんなにももっと簡単に養われることが出来ていた…」

彼の目は涙をこぼした。

「少しの間彼等の間を飛んだ。運ばれてきたごみの山に襲い掛かろうとするカモメ達の集団。

新しいごみの山をしびれを切らして待っている瞬間、集団で新しく運ばれたごみに襲い掛かる瞬間、食物の一片のどれかを最初のが奪い取る瞬間… その瞬間自分が小さく感じた。取るに足らない者。存在しない者。

喋れなかった。一言も言えなかった。」

...

急にその顔は穏やかになった。感情的な重荷は消えた。視線は空を見つめそして声は空ろな単調さを帯びたようだった。

「彼等を説得することは決して出来なかった、イアソン。そう感じた。それを知っていた…」

僕の努力はどれも無駄なのは見えていた。前から不運。

彼等に見るのを助けたいととても願っていた…

自分達で見ることを。

食物では充分でないことを思い出させようと。ただ生きるだけでは充分でないことを。そしてそうやってまた生きることができることを。生きることをやり直すことを、イアソン。

彼等の周りの世界について考えることをやり直すことを… 彼等自身のために…」

「けれど黙ってそこに留まった。何も言えなかった。彼等を説得することは決して出来なかった。

その時のように…

僕の生まれた島で。僕と一緒に育ったカモメ達。

出来なかった、彼等を言葉で説得しようとは決してしなかった。証明出来る何かじゃない、分るかい。嘴や羽を動かして説明できるような何かじゃない。」

話していた、まるで自分自身に…

「僕は彼等にとって一羽の風変わりな、孤独なカモメだった、イアソン。

僕が考えることを学びただけだとは決して感じなかった。彼等は食物を追いかけていた。今日を追いかけていて明日を忘れていた。

けれど僕はただそんな風には生きられないだろう。自分のことを僕は知らなければならなかった。空や海のことを。

ひとりで留まった、それで、飛ぶために。ひとり、決してそれを望まなかったとしても…

だけどあの小さな島の上を高く飛ぶのは好きだった。

そして高く飛ぶ時全てが取るに足らないようだった。

意義は高く飛ぶ時だけあるように思える、友よ。出来るだけより高く跳ぶことに。」

「もし彼等と僕のために何か出来ることがあるとしたら、もし結局何かすることを選択するとしたら、イアソン、ただ僕が自分自身であること…

僕が誰か別の者であるふりをしないこと。

勇気をもって存在すること。」

「しかし彼等を決して説得することはできなかったろう。彼等も、ごみ捨て場のカモメ達も。

僕に『何故』と尋ねても僕は何を答えるか知らなかったろう。羽があることを忘れたみたいなカモメ達にどうやって飛ぶ感情を描写すればいいか。空しくも別の羽を探すことを。

君が風を拒み、それが君を押し流さない時、彼等は僕に違っている理由を尋ねただろうにもそれを描写することが僕には出来なかっただろう。

そして最後に、何が残るのか僕に尋ねる時、結局僕等には決して何も残らないとどのように彼等に言えただろう、イアソン？

見返りはないとどのように言えただろう？」

イアソンは暫く黙っていた。彼の聞いていた表現は多分沈む太陽を見つめている一頭のイルカを思い出させた。辺りを闇が包んでいた時一頭のイルカが光を求めている。

そのように話している時その声には同じ哀しい単調さが、その目には同じ空虚な映像があった。

「決して誰も説得することは出来なかつたろう、アレクサンドロス。

もし千の生があつても多分… もし千の考え方があつたとしても…

もしそれぞれの中にきっかけとなる方法があつたら。その時世界はもっとよくなつていただろう。来たる全てのカモメ達とイルカ達、全ての生き物達が、最初の日から既に生きていただろう。

人生は時間の無駄じゃない。」

「けれど決して誰も説得することは出来ない、アレクサンドロス。

君と僕は、美しい嘘をつくことは決して出来なかつただろう。そして真実への怖れは皆に存在する。しか思考は決して教えられない、友よ、僕は知っている。思考は決して伝達出来ない。

ただ生まれて、火花のように多分、僕等の中で一瞬。膨らむままにする、或いは灰で覆う…」

「多分誰も誰かを説得する必要は決してない、アレクサンドロス。

僕等が自分で自分自身を説得するんだ。」

アレクサンドロスは羽を広げた。
体を軽く水に沈めながら、相棒を強く抱きしめた。

「僕は君がいてこんなにも幸運だ」、声を落として言った。「考えている誰かを見つけるのはこんなにも珍しいことだ。他の者達がいつか言ったことを尽く疑う誰かを。」

涙が彼等の目から流れた。

「君に会う前僕は世界でひとりぼっちだと思っていた。ひとりぼっちを感じていた、けれど存在しなければならなかつた…」

僕等は存在しなければならなかつた…」

多分僕等がいつか出会える日のために——誰が知るものか。」

彼等是一緒にいた、丁度分離線の上に、広大な二つの世界の孤独に逆らつて。

自分達のために涙を流してはいなかつた。もはやそうではない。恐らく泣くことの出来なかつたであろう者達のために涙を流していた。制約なしで考えることを学ぶと、もはや制限なく愛することが出来る。

他の者達のために涙を流すことが出来る。他の者たちのために飛び、泳ぐことすら出来る。その時彼等の感情を感じることが出来る。

そしてもはや自分のためだけに存在しなくなる。皆のために存在する。

知らない者達のために、君のことを知ることがないかも知れない者たちのために。

愛する時。

アレクサンドロスは海の表面を見つめた。

「どう彼等に話そう、イアソン？ どう彼等にその周りにあるのはごみだと言おうか、彼等自身がそれを食物だと言っているのに？」

“ごみ”という言葉は彼等には存在しないのに。もし存在したとしても、とっくの昔にその意味を忘れているのに。

それがあったから、そんなふうに単純に、差し替えた。丁度正反対に…」

水の上の反映に不器用に微笑んだ。

「多分そして僕の育った島、そして僕等が知った白い家々の島、そしてカモメ達が追っていた木造の漁船… 多分全部がごみ捨て場だった。

けれど僕等はそれが見えなかった。」

イアソンはそこで終わってはならない表現を続けた。

「多分そして今そういうごみ捨て場に僕等がいることは、アレクサンドロス、目を開けたくなくとも…」

彼等の視線は霞み海が消えるかに思える程だった。

「一本の分離線なんてない、アレクサンドロス。一本のみ存在するのではない。

沢山存在する。そして僕等を捕虜にしている。ただ僕等にはそれらが見えない。僕等はそれらを見正視したくない…」

...

「僕等はいつも見たいものを見る、友よ。そして望むなら全てを見ることが出来る。

一瞬で…」

「それとも決して何も見ないこと…」

涙が海に落ちる間に彼等の目は澄んだ。

* * *

時は穏やかに過ぎた。

アレクサンドロスとイアソンはかつて海の沖にある岩だらけの島を見捨てた者ではなかった。彼等は変わった。

彼等は一羽の思春期のカモメが成鳥になるほどに変わった。一頭の思春期のイルカが成獣になるほどに。

しかし彼等に、以前の特徴のどれかが識別出来ただろう。そして彼等の眼差しには同じ探究心がまだあった。

しかしそれでも、彼が知ると同じぐらい知っているイルカはいなかった。

実について、木や花について。湖や川について。滝について、火や火山について、崖や溪谷について。季節について、雨や雪について。雲について。空高く飛ぶ際の大地について、島や海について。飛ぶ感覚について。

彼が知ると同じぐらい知っているカモメはいなかった。

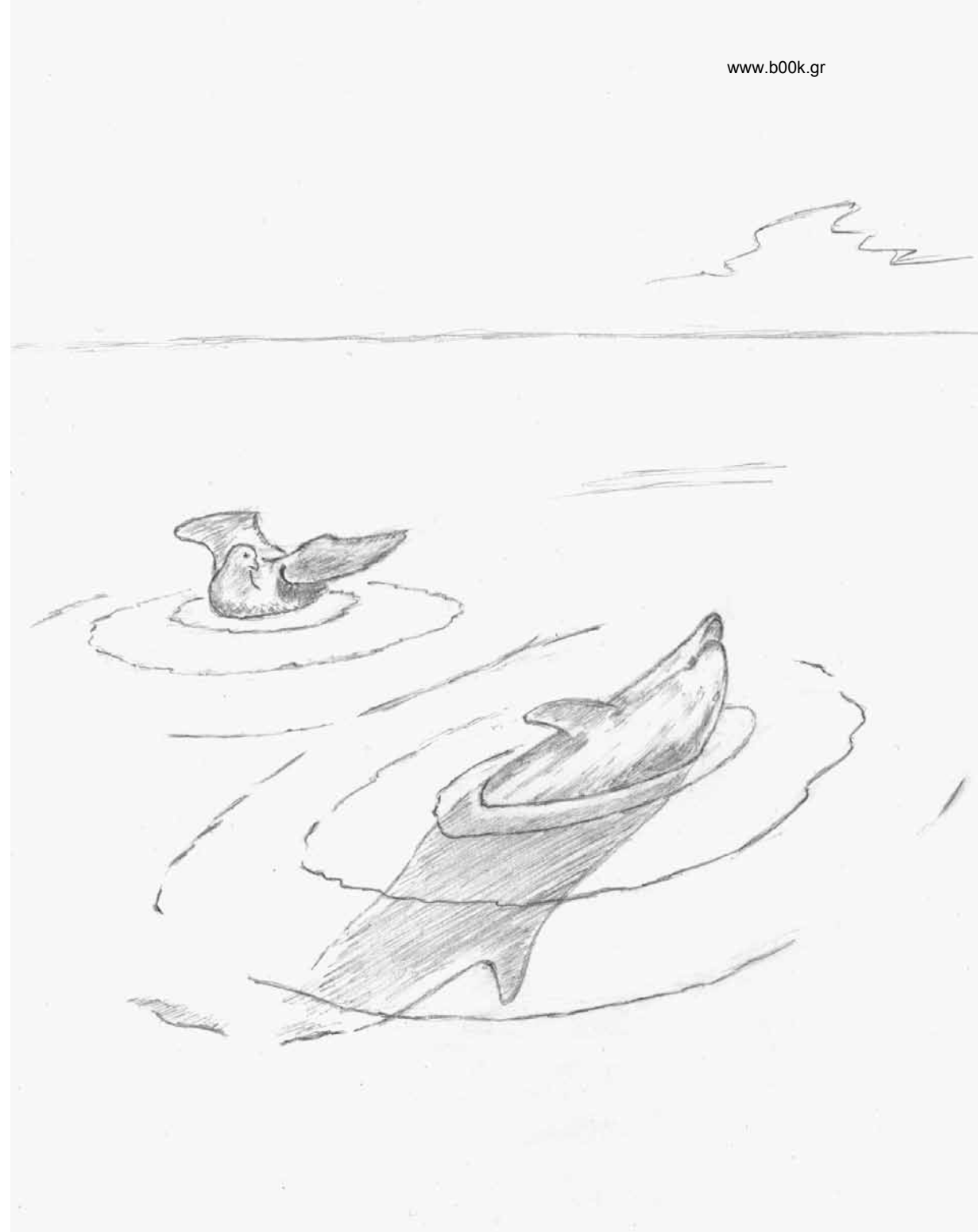
海綿について、珊瑚や貝について。深淵について。渦や海流について。魚や海洋哺乳類について。難破船について。洞窟や海溝について。泳ぐ感覚について。空高く跳び上がる感情について。

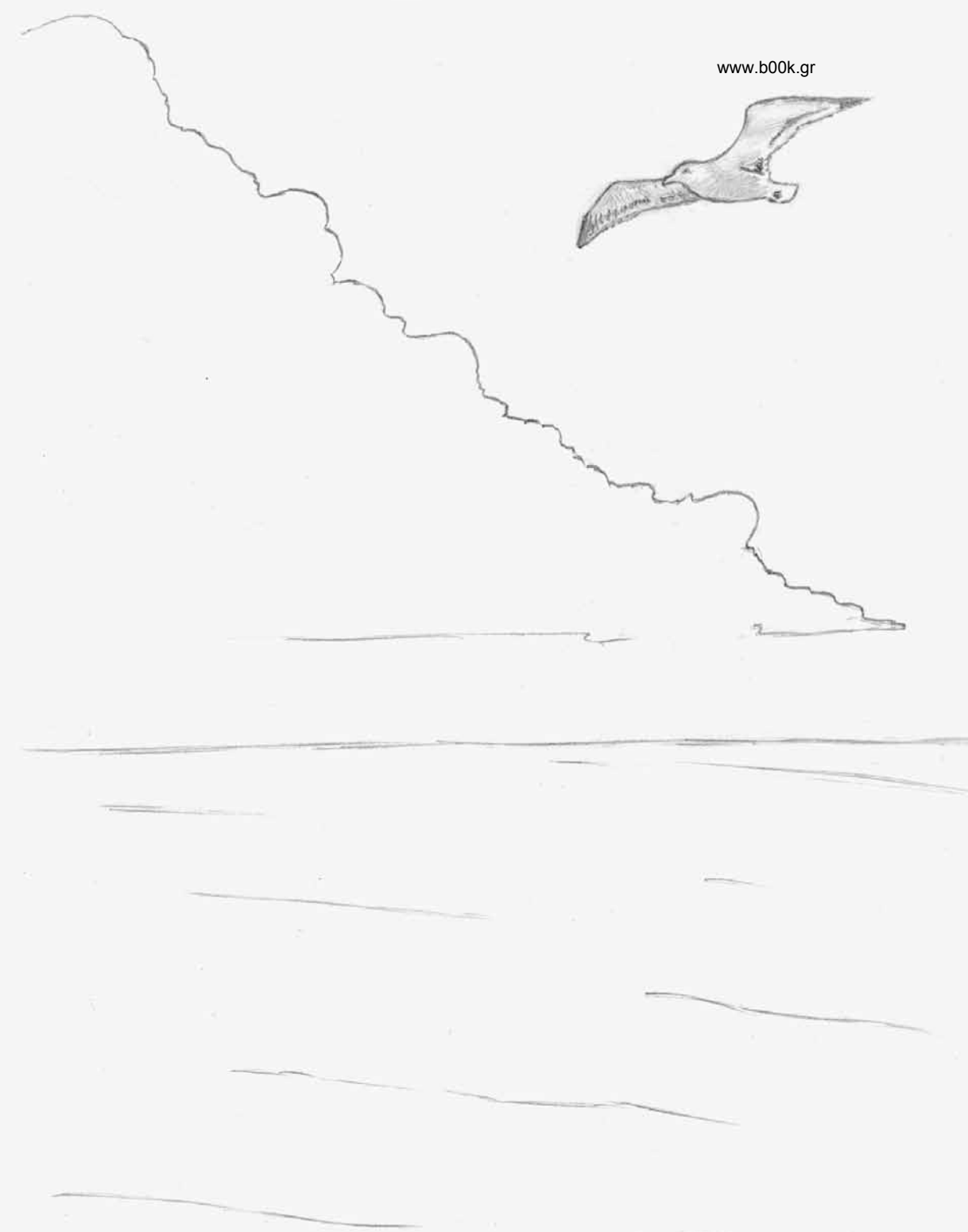
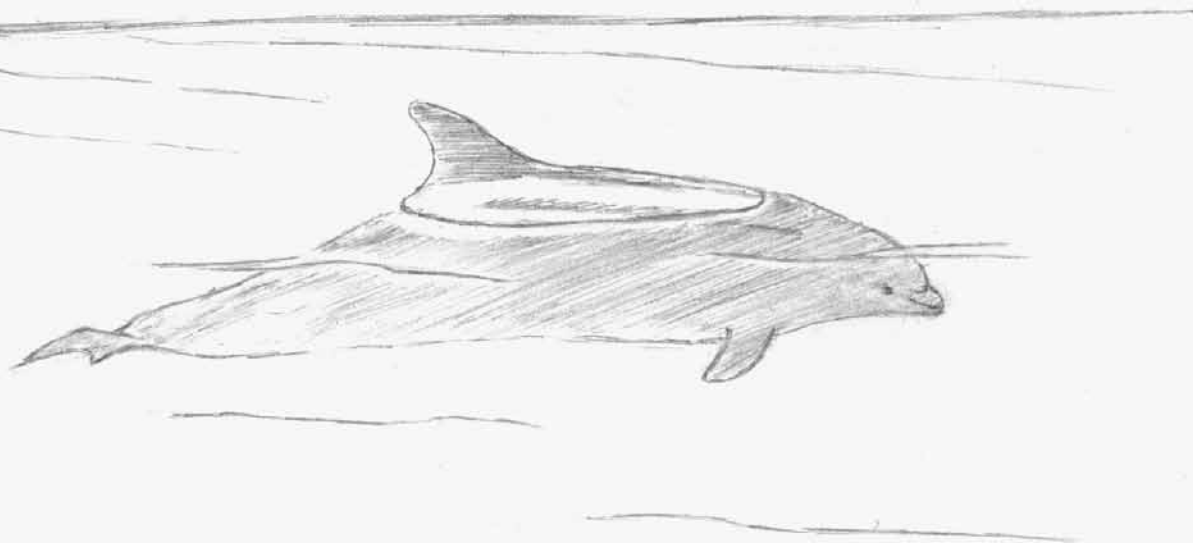
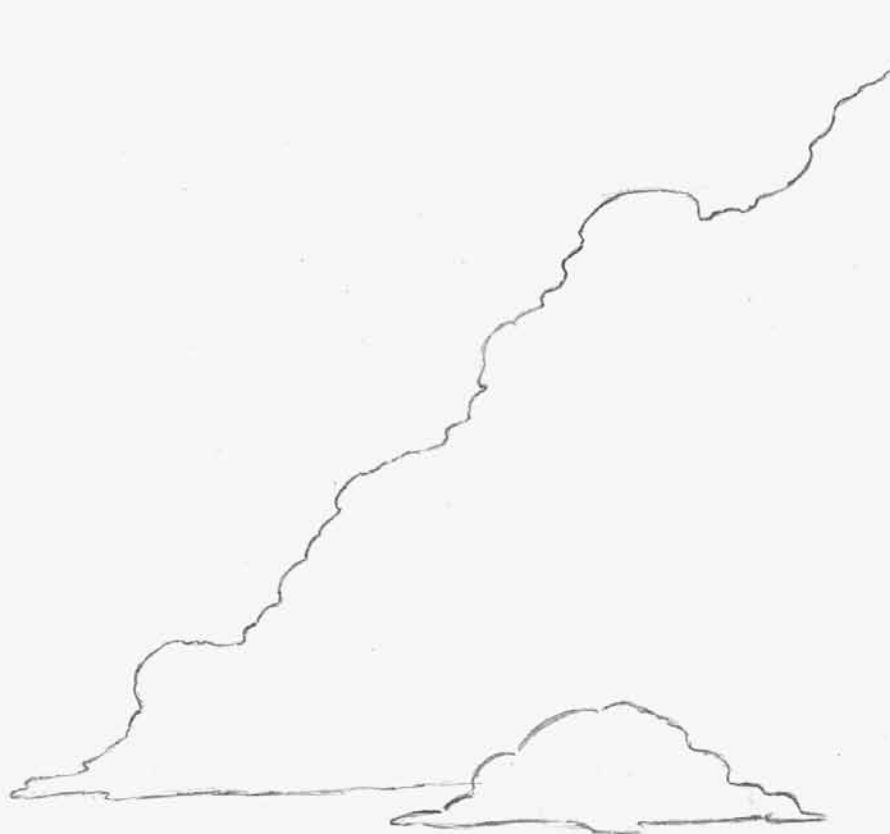
自分たちの世界をそれほどまでによく知っているイルカとカモメは他にいなかった。彼らは相手の世界を知ろうとすることでそれを学んだ。

自分たち自身をそれほどまでによく知っているイルカやカモメは他にいなかった。

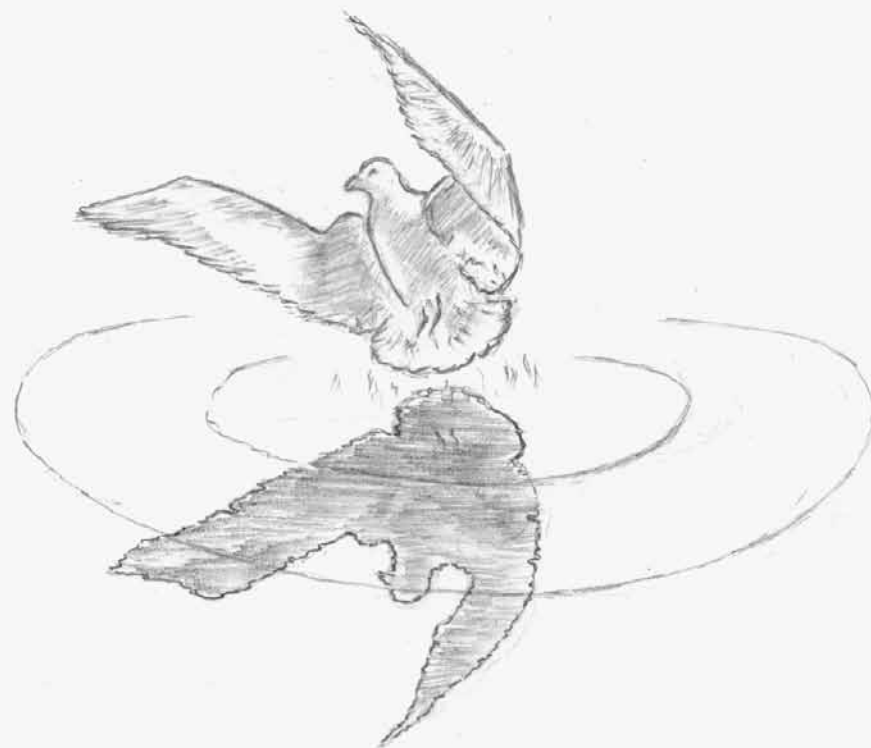
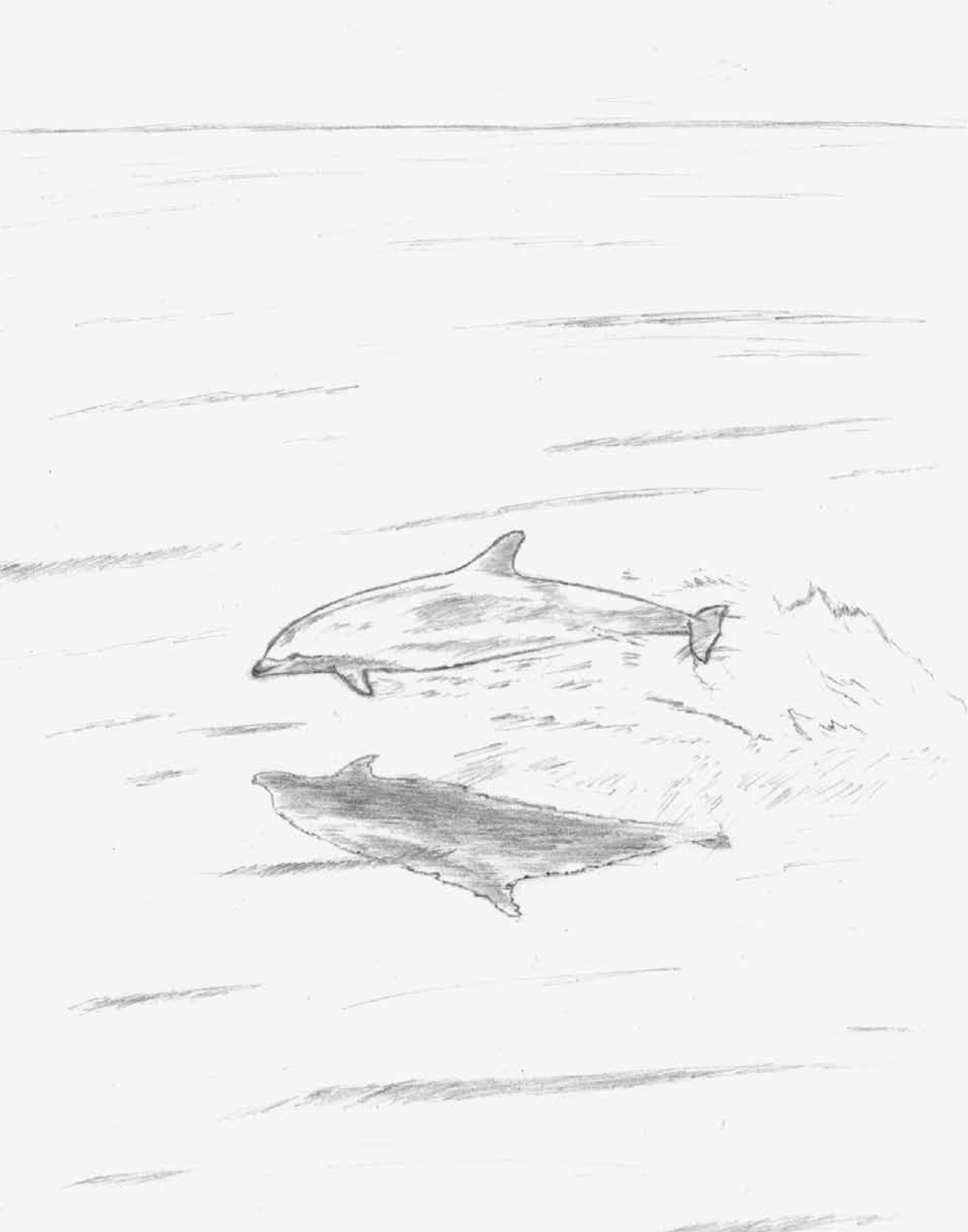
彼等はその可能性を、誰であるかをと何処にいるかを知っていた。如何に全てのうちの最小な一部に執着していたか。如何に“何か”に固執していたか。

しかし生きていることにもはや誇りを持っていた。存在する事に耐える感覚を。













* * *

厳密には何か判らなかったが、カモメのいない島、その小さい島で何かが彼等を引き付けた。陸地より遙か遠く離れた。

確かに彼等が出会った何にも似ていなかった。これまでの島は海に浮かんでいるようだった、しかしそれは…

傍らから見つめると、その端の一つは徐に途切れ水に落ちていた。残りは分離線の下に、やがて消える前に、一様に同じ高さに低くなっていった。

その島は他のどの島にも似てはいなかった。海に沈んでいるようだった。

或いはかつて沈み始め底に触れてそこに留まるに至ったような、二つの世界の狭間。

それらを永遠に融合するかのよう。それら両方に属し、どちらにももはや属さない。

...

唯一の頂、乾いた島の縁、空と地と海の間どこかに、佇んでいた。イアソンが彼をその近くで呼んでいた時外海を見つめていた。

「僕等の二つの世界は二つの継続する世界に他ならないと考えたことがあるかい？」彼に尋ねた。

「一つがもう一つの上に？」

考えたことはなかった。沢山の今まで考えたことのない事柄のように。多分意味がないから。

「とても違っているように思える、アレクサンドロス」、続けた、「だけど二つの世界は殆ど同じだ。」

「単に一つがもう一つの上にある二つの世界。水の代わりに空気。魚の代わりに鳥。

単に同じ世界の二つの面。」

—...

一空のずっと上に世界があるかも知れないと考えたことがあるかい？海のずっと下にある世界？僕等の視線はそれらに出会う前に止まることを？

...

空と陸と海の間はどこかから飛び立ち、よく知る世界に羽を広げた。自分の世界に。

分離線へ殆ど垂直に飛んでいた。これまでのどんな時より高く飛んでいた。

雲よりとても高く飛んでいた。海に影を投げかけるそれらを下に見ていた。そして飛び立った島は見えなかった、まるでようやく水に沈んだかのように。

凍えていた。しかし昇り続けていた。辛うじて呼吸していた。右の羽は疲れと寒さで痛んだ——幾つかの怪我は、結局、消えることはない。

もし今止まらなければ間もなく落ちていただろう。そしてもし落ちたら多分その落下を制御することが出来なかっただろう。

...

今一度ひとりはもうひとりの隣にいた。彼等の横には島が常にある場所にあった。

分離線へ殆ど垂直に潜った、これまでにないほど深く。もし降下をやめなければ、しかし、多分二度と戻れなかっただろう。そして海は深くなるにつれ絶え間なく暗くなっていった...

最後に小さな孤独な島を見つめた。何であつたかは知らないが、何かが彼等を引き付けた。

多分ただ見たことのない一つの島だった。

* * *

彼等がその奇妙な島に出合って暫くしてからアレクサンドロスが病気になった。突然、よくあるように。

イアソンに近付いて止まるよう頼んだ時、彼等は陸地から遠くを進んでいた。疲れを感じていた。

彼等は休み、そして続けた。しかし間もなくアレクサンドロスはまた疲れた。翌日彼等は必要なだけ何処かで止まらなければならないと決めた。

...

結局白と灰色の砂利で満ちた海岸に立った。

片端には海。

もう片端では砂利がその場所を急な高みに至るまでにますます大きくなる岩に譲っていた。

その高みは低いところからアレクサンドロスを見つめていた。

ほんの昨日まで彼にはとても小さく思えただろう。すぐにその頂に行けるだろうと。

けれど今日はどうやって彼の弱った羽に頼るか？

そしてどうやってイアソンの元へ再び飛ぶ？

過ぎる毎日により疲れを感じていた。もはや泳ぐことすら彼を疲れさせていた。陸に上がり熱い小石の上に座っていた。

イアソンは彼に食べるよう空しくも説得しようと努めた。空しくも彼を慰めようと努めていた。

それでも、一緒にいる時、空と海について話し合っている時、全てが以前のものであった。まもなくその羽を広げて最初から旅を始めるだろう。

新しい旅。今まで何も見ていないかのような…

...

そして再び探していた。彼の近くにいるカモメ達を呼んでひょっとして何か知っているのか尋ねた。ひょっとしてアレクサンドロスに何かできないか。しかし誰も知らなかった。

一羽だけが長老について話した。

海岸の端に幾つかの魚を集めた。

急な頭の動きでそれらを陸地に投げていた、彼の友人は多分何も食べないと恐れている。

アレクサンドロスは何処にも行かないよう頼んだ。

しかし居続けることは出来なかった。彼を助けることが出来ず苦しんでいるのを見ることは。

いずれにせよ心配する理由はなかった。一羽のカモメにとってはたった半日離れているだけだった。しかし速く泳いでいた。翌日の晩までに戻れるだろう。

そして気を付けるだろう。彼もまた気を付けるだけで充分だった。

彼に挨拶した。その後去った。

随分離れたと感じるや速度を上げた。出来る限り早く帰りたいかった。そうして出来るだけより早く長老の元に着きたかった。

彼に長老のことを話したカモメはそれがカモメ達の中で最も賢いと言っていた。確かに全ての病について知っている。しかしもはや飛ぶことを求めなかった。

その島にいます。

...

既に登り始めた… 一つの岩から他に飛び移りながら、ますます大きくなる岩をよじ登った。残った全ての力を振り絞った。

...

夜になるまで休まず泳いでいた。その時少し休むことにした。その後闇の中を泳ぎ続けた。

もし長老だけが彼を助けることが出来るのなら…
もし何か出来ることがあるのなら…

緑なす島に近付いている時夜が明けた。彼に言った通りだった。しかしその周りには白いカモメ達が飛んでいた。

彼の近くにいます者を呼んだ。長老に伝えるよう頼んだ。

そのカモメは驚いた。長老は決して誰のところにも行かなかった。皆が彼の元に行った。

勿論、今まで、カモメ達だけが彼を求めた。

そこで、島の最も高い頂の小さな洞窟に向かい始めた。

彼の元にゆっくりと飛んで来た。彼の後ろ、左と右に、他の二羽が続いていた。

イアソンの隣に降りた。二羽もその後降りた。

その姿は実際に多くを知る一羽のカモメのようだった。その生涯の間多くを見たことのある、その言葉を誰ももはや疑うことの出来ない姿。

一頭のイルカが一羽のカモメのためにその島まで行ったと聞いた時、一羽のカモメがイルカを友人に持つことが出来ると聞いた時、不思議に思った。

しかしそれ以上尋ねなかった。彼に何をすべきか助言した。

その後、二羽の白いカモメ達に彼の食事の世話をしに留まるよう言い、島の最も高い処にある洞窟へ向かってひとりで飛んで行った。

...

何も具体的なことは学ばなかった。カモメは彼に友人が休んでよく食べなければならないと言っただけで、カモメ達の神に彼を助けるよう願った。

それでも嬉しかった。あの島から去ったからだだった。

アレクサンドロスに向かって泳いでいたからだだった。

...

高みの裏側から登った。岩々が途切れる前に緩やかに高くなり、白と灰色の砂利の海岸から少し後ろの所。

辿り着かなければならなかった...

...

水の中を速く進みながら、尻尾をリズムカルに動かしていた。呼吸が必要な時だけ水面を裂いた。

太陽はゆっくり空を昇っていた。海の端のどこかで、雲は白く。

美しい一日だった。

* * *

砂利の上を目で探した。しかしそこにいなかった。
よく見つめた。
彼の体に震えが走った。
直感のようにそも視線を急な高みに上げた。

ゆっくりと大きな、白と灰色の羽を広げるのを見た。
羽は震えていた。

彼に叫んだ。
出来る限り大きく叫んだ。
しかし彼は答えることが出来なかった。彼の最後の
力を羽を広げたままにすることに使っていた。

しかし理解しただろう。いつも彼を理解していた…

それで、跳んだ、崖から…

* * *

いつも通りの日だった。

海は呼んでいるようだった。太陽は高く輝いていた。

その羽は耐えた。岩々に落ちる前に風に滑った。白と灰色の砂利の海岸を後にした。再び飛んでいた。再び飛んでいた、青い水の数メートル上を…

そしてその羽が折れたらしく見えたとき太陽はまだ輝いていた。

海がやっと彼をその近くに引き寄せた時。

完全に弱まっており、ほんの少しでも動くことができなかった。

その吻^{くちばし}を頭の下に付けて、軽く水から上げ、息が出来るようにした。

「イアソン、僕は死ぬ」、呟いた。

「駄目だ… 駄目だ…」

「お願いだ、僕を下に連れて行って…」

「下の何処？」

「下…」

分離線の下…」

涙がイルカの目に生まれていた——海に消える水の滴。

「君は死ぬ、アレクサンドロス…」

「誰も永遠には生きない… 覚えている？」

…

深呼吸をすることだけ求めた。その後^{くちばし}嘴でそっと止めた。

一緒に消えた。

* * *

その中に山々の斜面が低く続くのに沿って、ゆっくりと沈んでいった。

魚の群れは道を譲っていた。光線状の花々は集まっていた、生きているかのように、その白い隠れ家へ。貝達は閉じつつあった。

新しい群達が現われていた。道を譲っていた。

珊瑚や海草の間に隠れていた。生命に満ちた岩々の後に…

しかし圧力は強まり続けた。そして空は彼にそこに属すると叫んでいた。

…

その頭を水面に受けながら、彼の最後の息がその世界に帰還するのを見ることが出来た。

揺れる日の光の中を通り震えながら浮かび上がる。はかない可視的な光の束の中から、捕われて——判るだろう——水気のある成分で、時間の渦にしばし途切れた線の数々。

イアソンはその^{くちばし}吻を開いた。

水面からそんなにも下で、一羽のカモメもまた昇り始め、羽を大きく広げ、一方で一頭のイルカがそのまわりを何度も周回しながら。

隣同士で旅した。
ゆっくりと上り、揺れる日の光の中を通りながら、
はかない可視的な光の束の中から、途切れて——判る
だろう——時間の渦から…

* * *

広大な外洋に遠く、彼をまた一緒に連れて行った。

そこ、分離線の上に、一羽のカモメが羽をまだ広げ
たまま漂うだろう。一頭のイルカはまだ^{くちばし}吻を白と灰色
の亡骸に付けたまま悼んでいるだろう。

そこ、分離線の上に、かつて知られた線の上に、青
が^{うね}敵るだろう…

一頭のイルカが花々と木々の、金に種蒔かれた畑や
土の道の、雲に満ちた川や湖の世界に沈むだろう。

そして一羽のカモメがただ波に従っていた…

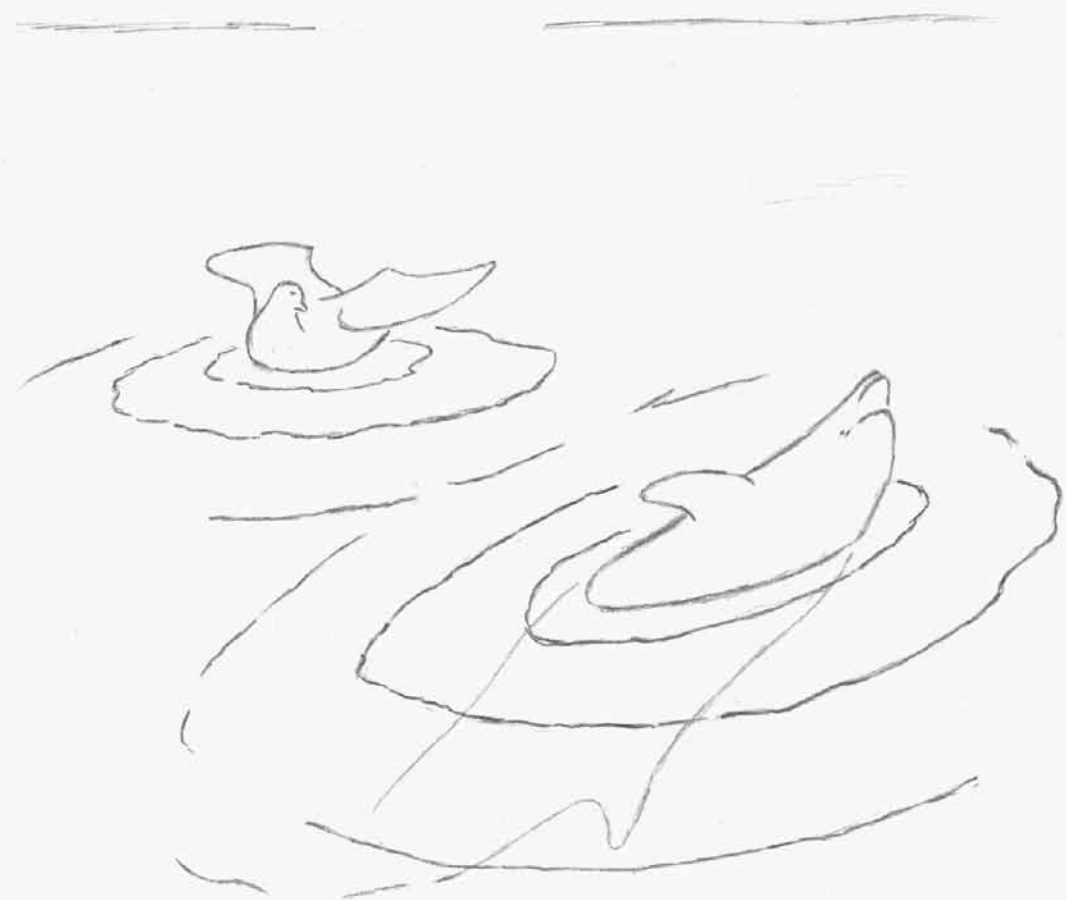
...

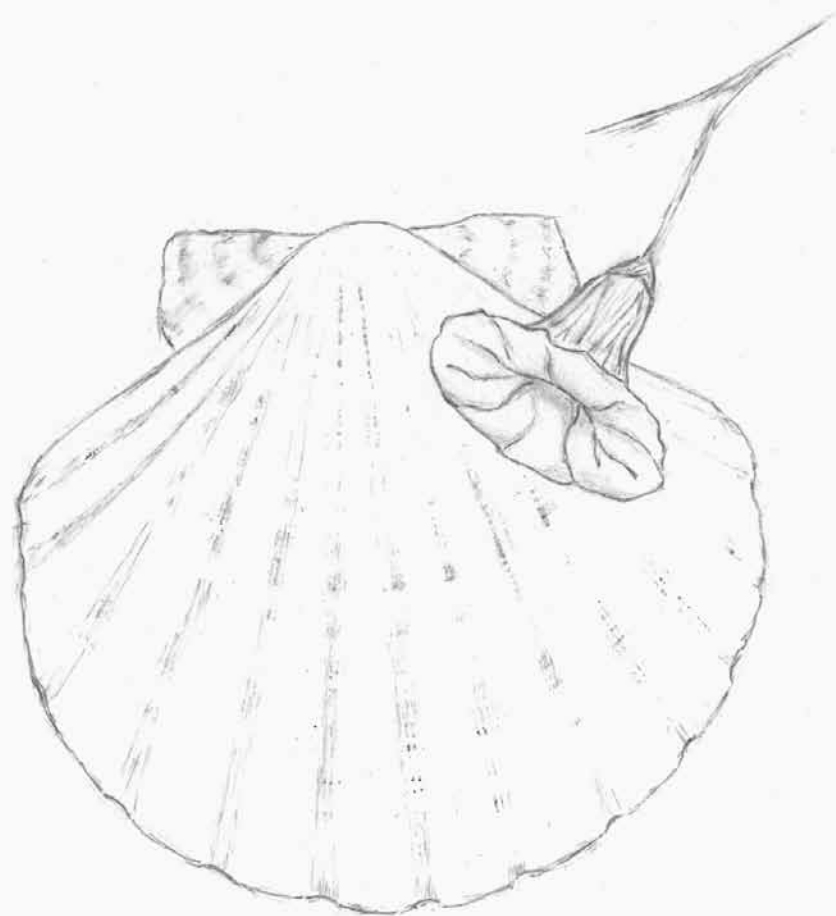
一羽のカモメが永遠にその目を閉じる前に、水平線
の向こうにある世界を見ることを成し遂げた。
その透明な束縛を打ち砕くことを。
本当に自由に飛ぶことを。

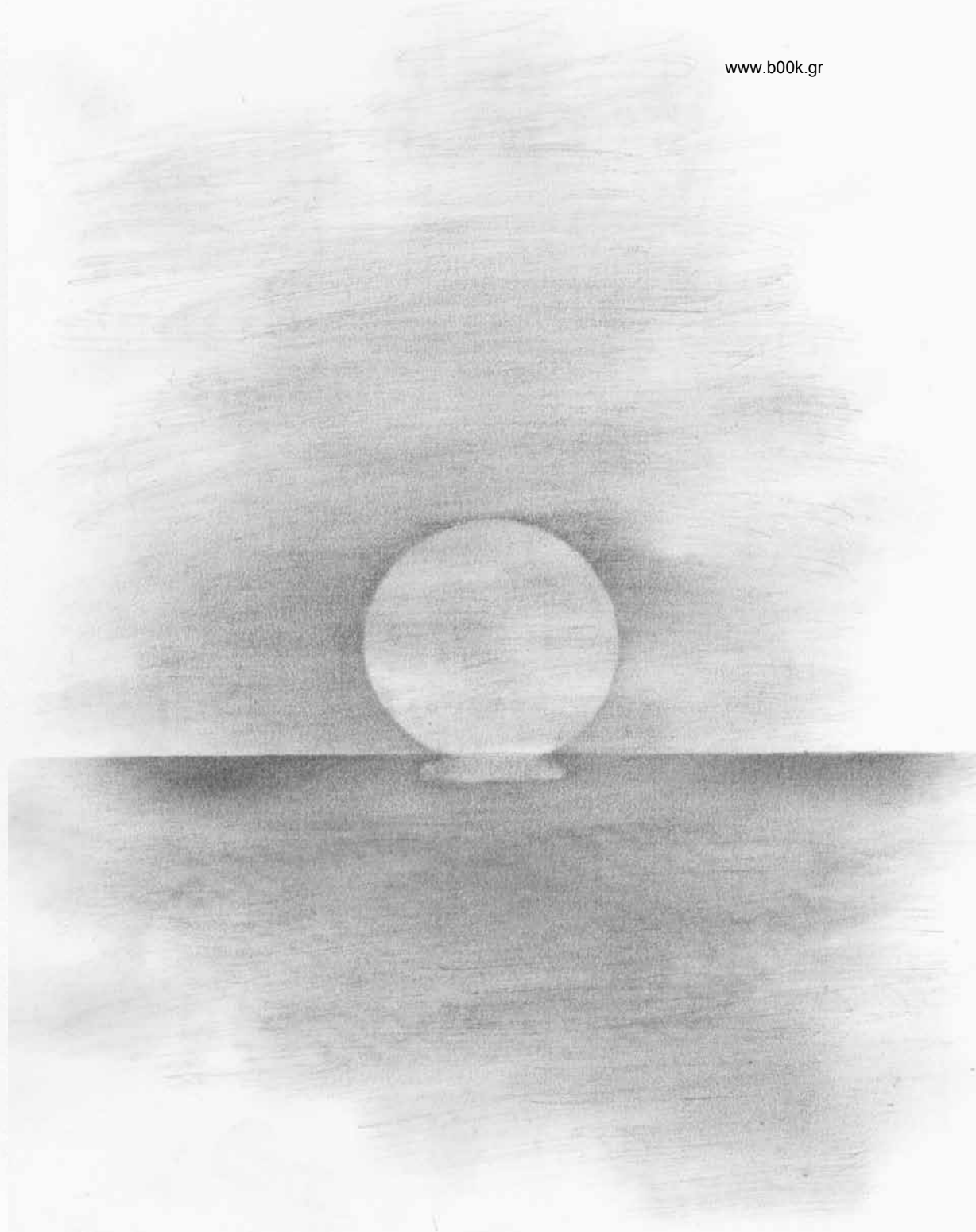
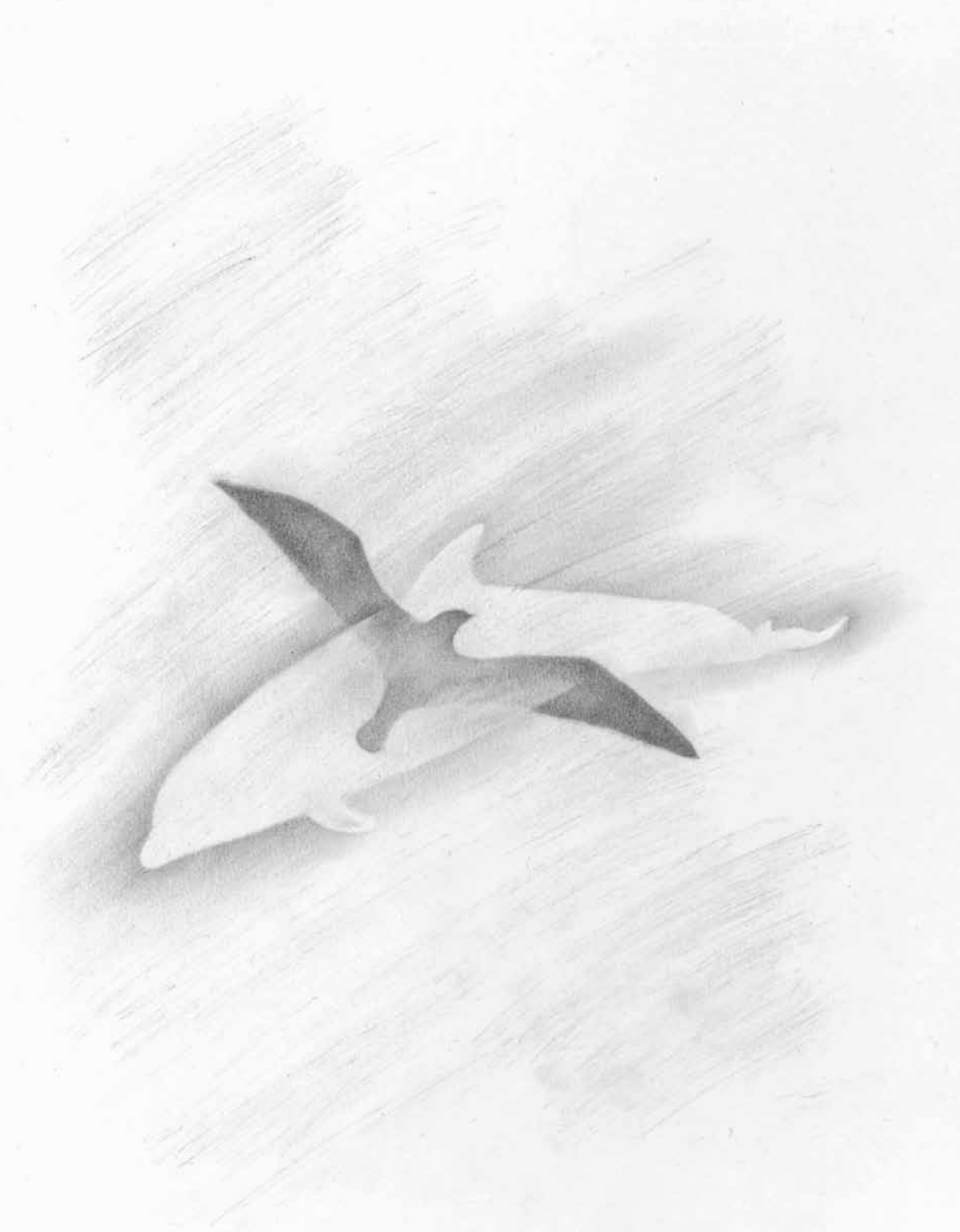
一羽の決して消えることのないそして消えることの
ないであろうカモメ…

永遠に生きる…

…少なくともイルカのどれかが
底を飛ぶ限り。







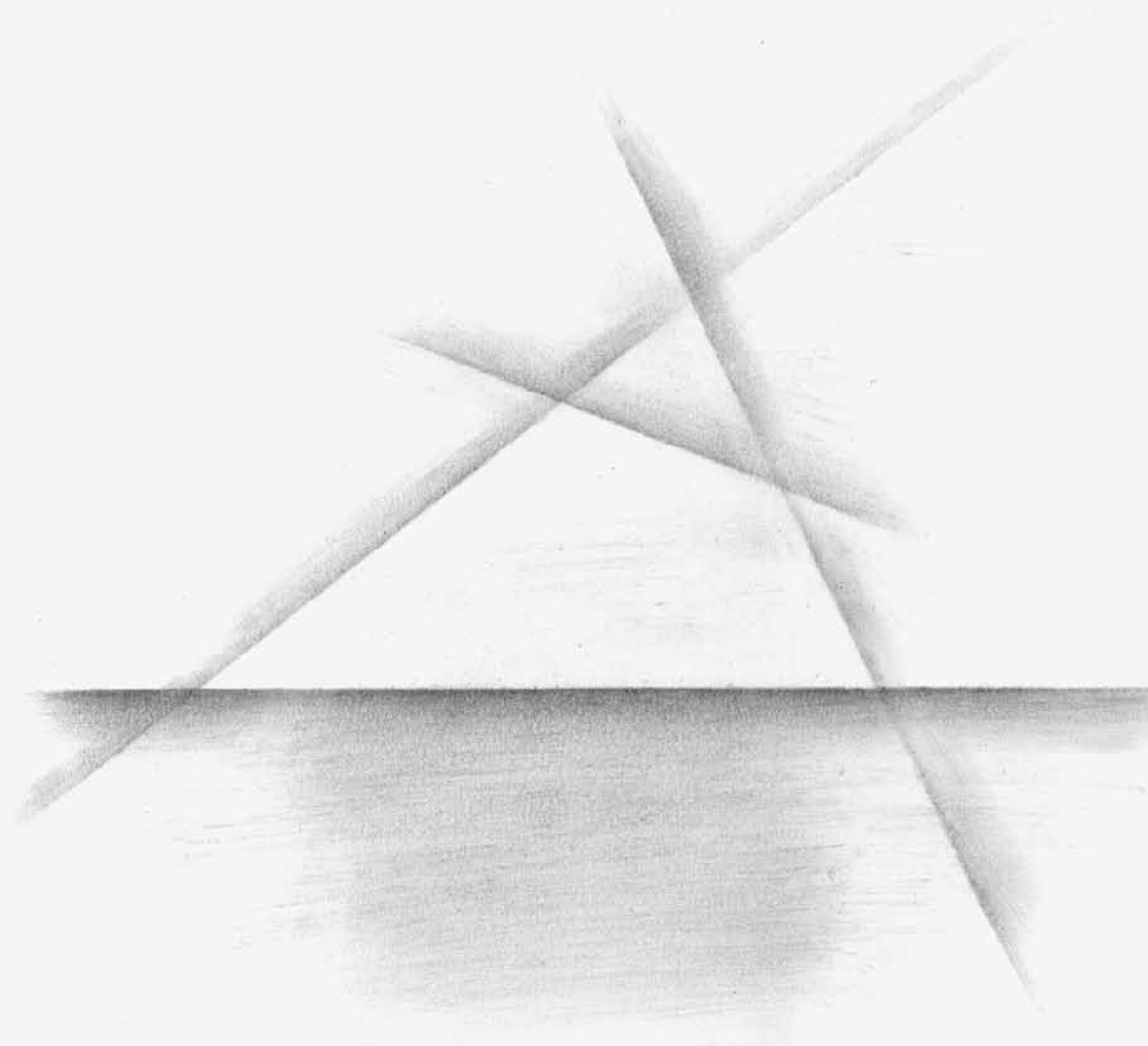
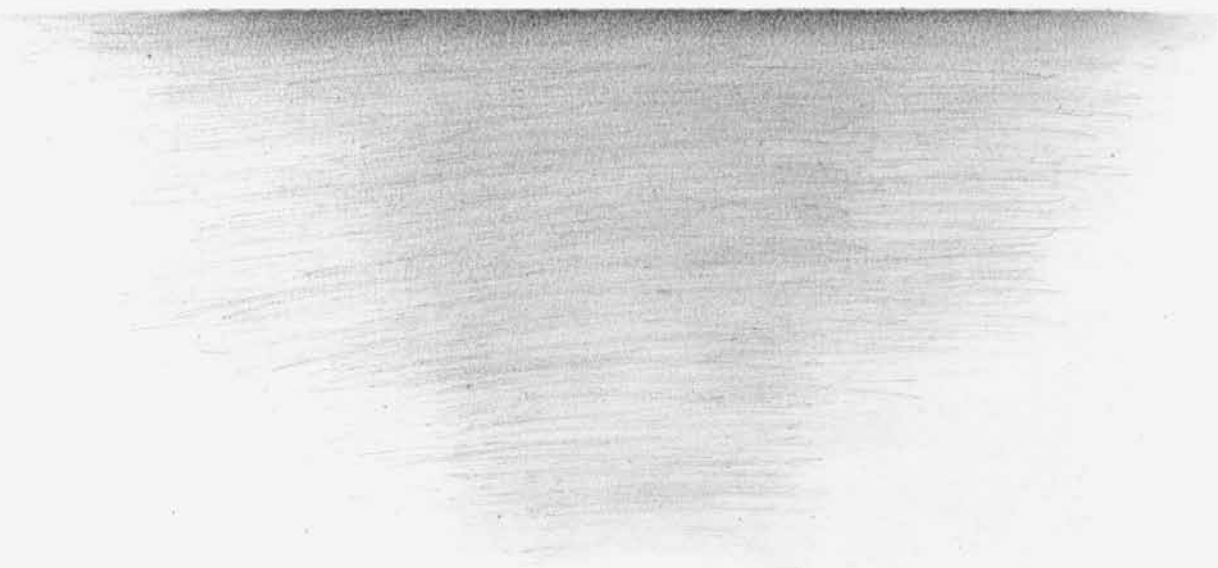


一つの宇宙の何処かに迷い、
他の世界に囚われたような、
距離に隔てられた沢山の太陽達、
無限の線に隔てられた太陽達…

しかし覚えているかい？

僕等の頭に驚くほど小さい一部がいつも存在する、
自然の法則に決して従わないところの。

そして始まりは既に起きている…





…存在しないある本の
ページから…